

神戸市長田区

御 船 遺 跡

神戸市道高速道路2号線(神戸山手線)建設事業に伴う発掘調査報告書

2005年

兵庫県教育委員会

神戸市長田区

御 船 遺 跡

神戸市道高速道路2号線(神戸山手線)建設事業に伴う発掘調査報告書

2005年

兵庫県教育委員会



北1・2区 古墳時代の土器（手前2列：SD03 後方：SH01）

例　　言

1. 本書は神戸市長田区大道通1丁目・2丁目に所在する御船遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、神戸市道高速道路2号線（神戸山手線）建設に先立ち、阪神高速道路公団神戸第一建設部の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。
3. 調査は、平成9年度に最初の確認調査（遺跡調査番号970131）を行い、平成10年度～12年度の間に、確認調査と5次にわたる本発掘調査（遺跡調査番号980178・980273・990134・990143・2000273）を実施した。
4. 調査で使用した座標は、旧日本測地系による国土座標第V系である。また、水準はT.P.を使用した。
5. 現地での写真撮影は、各調査担当者が行った。遺物写真はタニグチフォト株式会社に委託して行った。
6. 整理作業は、平成16年度に阪神高速道路公団からの依頼にもとづいて行った。
7. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「神戸主部」・「神戸南部」および神戸市発行の1/2,500地形図「長田」（昭和48年）の一部である。
8. 本書の執筆は目次に示したとおり、調査担当者が行った。編集は嘱託職員尾鷲都美子の協力を得て、藤田が行った。
9. 本書にかかる遺物・図面は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　魚住分館（明石市魚住町清水字立合池の下630-1）で保管している。また、写真については同事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）で保管している。

本文目次

第1章 調査の経緯	(藤田・長演)
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査と整理作業の経過	1
第2章 御船遺跡の位置と歴史的環境	(藤田)
第1節 遺跡の位置	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 北1・2区の調査	(藤田)
第1節 遺構の概要	9
第2節 層序	10
第3節 下層遺構面の遺構と遺物	12
第4節 上層遺構面の遺構と遺物	13
第5節 包含層出土の遺物	22
第6節 小結	23
第4章 北3区の調査	(藤田)
第1節 遺構の概要と層序	25
第2節 遺構と遺物	25
第3節 小結	32
第5章 南地区の調査	(長演・上田)
第1節 層序と遺構の概要	33
第2節 中世の遺構と遺物	33
第3節 包含層出土の遺物	41
第4節 小結	44
第6章 結語	(藤田) 47

図版目次

- 図版1 北1区
全景（東から）／西端部全景（南から）／西端部全景（西から）
- 図版2 北1区
西端部北壁（南から）／中央付近南壁（北東から）／東端部東壁（南西から）
- 図版3 北1区
SD03（北から）／SD03（西から）／SD03断面（北から）／SD03土器出土状況（東から）／SD03西側の足跡状産み（南から）／SB01-P7断面（西から）／SB01-P8断面（南から）／SD01断面（東から）
- 図版4 北2区 水田状区画
全景（東から）／全景（西から）／全景（南西から）／上面検出状況（西から）／断面（南東から）
- 図版5 北2区
全景（東から）／溝全景（北から）
- 図版6 北2区 SD03
全景（北から）／土器出土状況（北西から）／土器出土状況（西から）／断面（南から）／調査区南壁の断面（北から）
- 図版7 北2区
SD06断面（北から）／SD07断面（南から）／SD02断面（西から）
- 図版8 北2区 SB01
全景（南から）／P1断面（南から）／P2断面（南から）／P3断面（南から）／P4断面（南から）
- 図版9 北2区 SH01
全景（南から）／検出状況（南から）／土器出土状況（南東から）／土器出土状況（西から）／土器出土状況（西から）
- 図版10 北3区
全景（西から）／南壁東端部（北西から）
- 図版11 北3区
SK02（北から）／SK03（南東から）／SK04（南西から）
- 図版12 北3区
SK01土器出土状況（南から）／SK01土器出土状況（北から）／SK01完掘状況（南から）
- 図版13 南地区
南地区付近空中写真（東から）／南地区遠景（東から）
- 図版14 南地区
南1区全景（西から）／南2区全景（南から）／南3区全景（西から）

- 図版15 南地区
南1区北壁（南から）／南1区下層トレンチ北壁（南から）／南2区北壁（南から）／南3区
南壁（北から）／南1区作業風景／南2区作業風景
- 図版16 南地区
S B 0 1～0 3 全景（東から）／S B 0 1～P 1 断面（南から）／S B 0 1～P 1 根石検出状
況（南から）／S B 0 1～P 1 3 断面（南から）
- 図版17 南地区 S E 0 1
全景（南から）／上層断面（南から）／埋土上層木器出土状況（南から）／曲物（南から）／
曲物断ち割り断面（南から）
- 図版18 南地区
S K 0 1 完掘状況（東から）／S K 0 1 断面（西から）／S K 0 2 完掘状況（北から）／S K
0 2 断面（東から）／S K 0 3 完掘状況（北から）／S K 0 3 断面（西から）／S K 0 4 断面
(南から)／S K 0 5 断面（東から）
- 図版19 北地区 出土土器1
- 図版20 北地区 出土土器2
- 図版21 北地区 出土土器3
- 図版22 北地区 出土土器4
- 図版23 北地区 出土土器5
- 図版24 北地区 出土土器6・石器・金属器
- 図版25 南地区 出土土器1
- 図版26 南地区 出土土器2
- 図版27 南地区 出土木器

挿 図 目 次

第1図 御船遺跡調査箇所位置図	2
第2図 周辺の遺跡	6
第3図 下層の遺構配置	9
第4図 上層の遺構配置	10
第5図 北1・2区土層断面	11
第6図 S B 0 1	12
第7図 S D 0 2	13
第8図 S D 0 1 出土土器	13
第9図 水田状区画	14
第10図 S H 0 1	15
第11図 S D 0 3～0 7	16

第12図	S D 0 3 遺物出土状況	17
第13図	S D 0 4 出土土器	18
第14図	S H 0 1 出土遺物	19
第15図	S D 0 3 出土土器（1）	20
第16図	S D 0 3 出土土器（2）	21
第17図	S D 0 3 出土石器	22
第18図	包含層出土の土器	23
第19図	北3区全体図	26
第20図	北3区南壁土層断面	27
第21図	S K 0 2 ~ 0 4	28
第22図	S K 0 1 · 0 5	29
第23図	S D 0 1 ~ 0 3	30
第24図	S K 0 3 出土土器	31
第25図	包含層出土金属器	31
第26図	S K 0 1 出土土器	31
第27図	南地区全体図	34
第28図	南地区土層断面	35
第29図	S B 0 1 · 0 2	36
第30図	S B 0 3	37
第31図	S E 0 1	38
第32図	土 坑	39
第33図	遺構出土土器（1）	40
第34図	遺構出土土器（2）	41
第35図	S E 0 1 出土木器（1）	42
第36図	S E 0 1 出土木器（2）	43
第37図	南地区上層包含層出土土器	44
第38図	南地区下層包含層出土土器	44
第39図	御船遺跡の変遷	48

表 目 次

第1表	神戸市道高速道路2号線（神戸山手線）建設事業に伴う遺跡発掘調査	3
第2表	フレール長田大道建設事業に伴う発掘調査	3
第3表	市営住宅建設等に伴う発掘調査	3
第4表	周辺の遺跡一覧	7

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

神戸市域西部は、西神ニュータウンをはじめとする大規模住宅団地の開発や産業団地の整備が進められるなど発展の一途をたどっている。しかし、この地域は南北を結ぶ幹線道路の整備が立ち遅れているために、周辺の生活道路は慢性的な渋滞に悩まされている。そこで、神戸市街地との連絡を円滑にして地域社会の利便性を図るとともに、主要道路とのネットワークを結ぶことによって、渋滞の緩和など将来的な交通需要に対応するするために「神戸市道高速道路2号線」の建設が計画された。

この「高速2号線」が完成すると、阪神高速7号北神戸線と3号神戸線が直接結ばれ、神戸西部エリアから神戸都心部へのアクセスがより便利になり、交通渋滞が緩和されることで沿道の環境改善にも寄与することが期待される。さらに、7号北神戸線と接続することで、六甲山系を縦貫する南北軸となり、阪神・淡路大震災のような災害時にも機能を発揮するなどの役割を果たすことが期待されている。

この延長11.8kmの路線は、昭和59年の妙法寺地区北部トンネル工事を皮切りに工事が進められ、平成3年には、長田区の市街地を縦断する蓮池町～南駒栄町の区間が着工された。長田区蓮池町（長田出入口：仮称）から白川ジャンクションまでの7.3kmについては、平成15年8月26日開通した。

周辺の埋蔵文化財については、平成8年度当初には長田区神楽町の神楽町遺跡、同五番町の長田南遺跡などが知られていたものの、御船遺跡の存在はまだ判明していなかった。しかし、同年、震災復興事業に伴い、神戸市教育委員会が川西通り3丁目で行った発掘調査で、鎌倉時代の集落遺跡の存在が明らかとなり、御船遺跡と命名された。さらに、翌年にも、市営住宅や教会の建設に伴い発掘調査が実施され、遺跡の広がりや内容が次第に明らかにされていった。

兵庫県教育委員会でも、阪神高速道路公团による用地買収等の進捗状況に応じて協議を行い、平成9年5月6日に路線内的一部の確認調査を実施した（遺跡調査番号970131）。その後、平成10年～12年の間に地点を変えて確認調査を実施した。

確認調査によって遺跡の存在が判明した地点については、順次、本発掘調査を実施した。調査に当たっては、構造物の撤去や工事の進捗状況と調整を図る必要があったため、隣接した狭い範囲内であっても、同時に調査できず、期間を異にして調査を行っている。

御船遺跡の発掘調査は、神戸市教育委員会実施分も含め、平成9年度以降に多数実施されており、第1～第3表にはその一覧を、調査箇所は第1図に示す。これらの調査以外に、神戸市道高速道路2号線建設に伴う埋蔵文化財の確認調査は、新添川沿いの事業地内で実施されているが、いずれも本発掘調査には至っていない。

第2節 調査と整理作業の経過

1. 北1・2区の調査

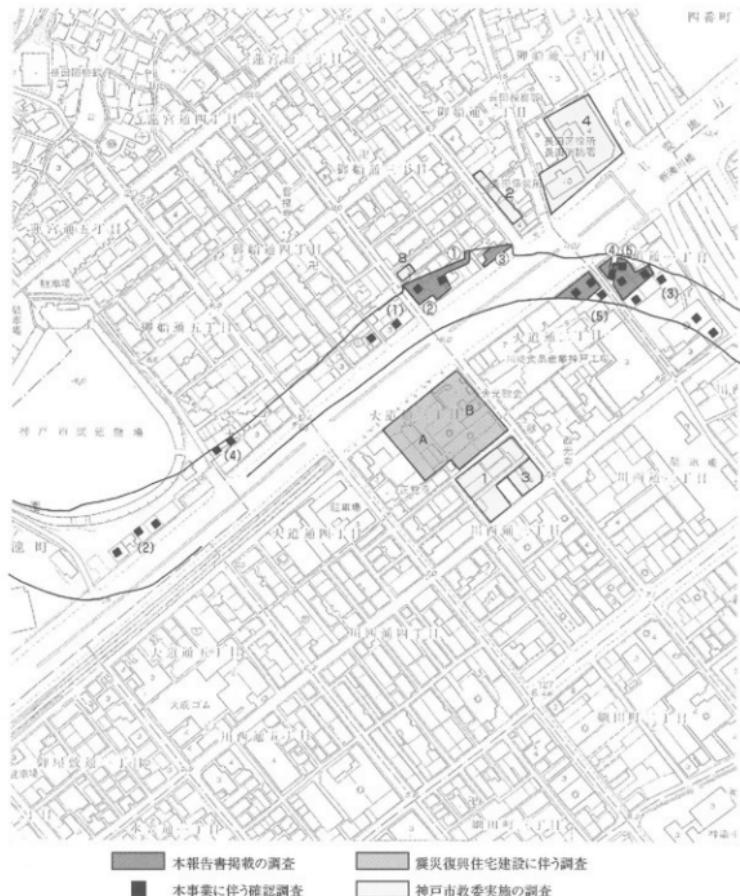
北1・2区は主要地方道神戸・明石線の北側に位置し、遺跡の範囲の北西端付近にあたる。

確認調査は平成9年度に実施し((1))、対象範囲の東半で古墳時代の遺構面が認められたため、本発

掘調査を実施することとなった。本発掘調査は2回に分けて、平成10年度内に実施した(①・②)。

北1区は道路の擁壁部分にあたり、工事の進行状況から先行して調査を実施する必要があった。幅1m~3m程の調査区は、延長44mに及ぶが、柱穴や流路などの遺構や古墳時代の遺物包含層の広がりは西半の20m分ほどに限られ、東側ではごく希薄な遺物包含層が広がっているだけであった。

この結果をもとに、道路本線部分にあたる北2区の調査は、北1区の西半部分に限定して行うこととした。北2区では、古墳時代の掘立柱建物跡や堅穴住居跡、流路などが発見され、掘立柱建物跡は北1



第1図 御船遺跡調査箇所位置図 (1/3,500)

区の柱穴と組み合って1棟の建物が復元できた。竪穴住居跡は、調査区の南側に延びるが、既存建物の基礎で破壊されてしまっている。

また、北1区では確認できなかった水田状の長方形区画が掘立柱建物よりも上層で発見され、竪穴住居跡もこの水田状区画を切っていることが判明した。北1区の調査時には、掘立柱建物跡と流路は同一面上の遺構と判断していた。また、水田状区画と同一と考えられる遺構面上では、流路の輪郭などは不明瞭であったため、水田状区画と竪穴住居跡は、これらよりも上層の遺構と判断して調査を進めた。

しかし、その後の整理作業などを通じて、流路内から出土した遺物の大半は、竪穴住居跡出土の遺物よりも新しい時期のものであることが判明し、遺構と遺構面との関係を見直す必要が生じた。

本報告では、出土遺物や土層断面を再検討し、掘立柱建物跡とその周辺の溝を下層の遺構とし、水田状区画、竪穴住居跡、流路を上層の遺構として報告している。したがって、発掘調査時に撮影した全景写真の状況とは齟齬を生じている部分があることを了解願いたい。

第1表 神戸市道高速道路2号線（神戸山手線）建設事業に伴う発掘調査

No	地区名	調査番号	種別	調査担当者	調査期間	面積	調査結果
①	北1区	980178	本発掘	平田博幸 藤田淳	平成10年11月9日 ～平成10年11月16日	150m ²	古墳時代後期：掘立柱建物・ 竪穴住居跡・水田状区画・ 流路
②	北2区	980273	本発掘	平田博幸 藤田淳	平成11年3月8日 ～平成11年3月26日	197m ²	
③	北3区	990134	本発掘	藤田淳 仁尾一人	平成11年4月19日 ～平成11年4月27日	37m ²	古墳時代前期：土坑
④	平成11年度調査区	990143	本発掘	甲斐昭光 川村慎也	平成11年5月17日 ～平成11年5月19日	135m ²	鎌倉～室町時代：土坑
⑤	南1～3区	2000273	本発掘	長瀬誠司 上田健太郎	平成12年12月27日 ～平成13年2月23日	656m ²	中世：掘立柱建物・井戸
(1)	北1区	970131	確 認	柏原正民	平成9年5月6日	16m ²	一部について本発掘調査必要
(2)		980179	確 認	高瀬一嘉	平成10年11月12日	6m ²	
(3)	南1～3区	980207	確 認	高瀬一嘉	平成10年12月17～18日	36m ²	一部について本発掘調査必要
(4)		990163	確 認	甲斐昭光 田中秀明	平成11年6月22日	12m ²	
(5)		2000232	確 認	吉澤雅仁	平成12年7月28日	18m ²	

第2表 フレール長田大道建設事業に伴う発掘調査（兵庫県教育委員会実施分 本発掘調査のみ）

No	調査番号	調査担当者	調査期間	面積	主な遺構
A	970413	平田博幸・丹家昌博・高瀬一嘉	平成9年12月25日 ～平成10年3月3日	726m ²	
B	980084	平田博幸・藤田淳	平成10年5月19日 ～平成10年6月2日	120m ²	鎌倉時代初：掘立柱建物

第3表 市営住宅建設等に伴う発掘調査（神戸市教育委員会実施分 本発掘調査のみ）

調査次数	担当者	調査期間	面積	主な遺構
第1次	東喜代秀	平成8年8月22日 ～平成8年9月25日	280m ²	鎌倉時代：掘立柱建物・井戸
第2次	池田毅	平成9年4月8日 ～平成9年6月11日	600m ²	弥生時代後期：水田址 古代～中世：掘立柱建物・井戸
第3次	富山直人	平成9年5月27日 ～平成9年6月5日	300m ²	
第4次	西洞誠司 藤井太郎	平成10年4月1日 ～平成10年5月27日	347m ²	弥生時代後期：水田址 古墳時代後期：掘立柱建物・竪穴状遺構
第8次	石島三和	平成11年3月17日 ～平成11年3月30日	80m ²	

2. 北3区の調査

北3区は、北1・2区の東隣で、神戸市教育委員会の第2次調査地点の西側にあたり、平成11年度に本発掘調査を実施した（③）。北1区の調査結果から、遺構の広がりは希薄であると予想されたため、当初は3箇所のトレンチ調査を行った。その結果、遺物量は少ないものの、古墳時代前期の遺構と考えられる落ち込みが発見されたため、そのまま、本発掘調査に移行した。

本発掘調査では、同一面で発見された古墳時代前期と鎌倉時代末の土坑などを調査した後、一部を重機で深掘した。北3区の北側で神戸市教育委員会が行った御船遺跡第2次調査では、弥生時代後期の水田が発見されており、その広がりを確認する必要があったためである。しかし、砂礫層が統いており、下層に遺構面は存在しないことが判明した。

3. 南地区の調査

南地区は主要地方道神戸・明石線の南側、新湊川（旧刈藁川）右岸に位置し、遺跡の範囲の東端付近にあたる。

確認調査は平成10年度と平成11年度に実施し（③・⑤）、遺物包含層および遺構が確認された範囲、東西約70m、南北約30mを本発掘調査の対象とした。南地区的調査は工事の進捗状況にあわせて行つたため、本発掘調査は平成11年度と平成12年度に分けて実施した（④・⑤）。

調査区はトレンチ状に設定した平成11年度調査区と南北にのびる道路の東西両側を調査した平成12年度調査区に大別できる。さらに既存の道路・埋設物を除外して調査区を設定したため、平成12年度調査区は道路の西側の南1区、東側の平成11年度調査区をはさんで北側の南2区と南側の南3区に分かれる。このように、南地区的調査年度は2年次にわたり、合計4地区に細分されることになった。

調査対象範囲はほぼ全域にわたって1mを超える盛土があり、盛土部分の掘削は崩落の危険を防止するため、十分な安全勾配を確保して作業をすすめた。その結果、実際に調査を実施した面積は当初設定した面積よりさらに狭くなってしまっており、隣接する調査区との間に空白地が生じている部分もある。

平成11年度の本発掘調査は、工事に先行して移設する埋設物の移設箇所を対象に実施した。工事の性格上幅25m、長さ28mを調査対象としたが、実際には搅乱や埋設物があり、延長15m分についてのみトレンチ状に調査した。南半部は遺構面上を洪水砂が覆う。遺構面上で柱穴1基、断面で土坑を1基検出した。

平成12年度の本発掘調査では、掘立柱建物跡、井戸、土坑などの遺構を検出した。また下層より弥生時代～古墳時代の土器が出土した。

なお、平成12年度の調査においては、掘削土の仮置きのため、南1区、南2区、南3区の順に調査し、調査終了した地区は埋め戻しを行い掘削土の仮置き場とした。また、小型ヘリコプターによる空中写真撮影を中日本航空株式会社に委託して実施している。

4. 整理作業の経過

整理作業は平成16年4月から開始した。

土器を中心に、接合・補強、実測、復元、写真撮影、遺構図補正、トレース、レイアウトまでの諸作業は10月中にはほぼ完了し、編集作業を経て年度内に本報告書を刊行した。また、金属器の保存処理も本年度中に実施した。

第2章 御船遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

御船遺跡は、六甲山地の南麓、神戸市長田区御船通1丁目～大道通4丁目にかけての範囲に所在する。

六甲山地はその東北部に位置する六甲山（標高931m）を主峰とし、南西方向に向かって摩耶山、再度山、高取山と次第に標高を下げ、西端の鉢伏山では200mほどの高さとなる。山地南麓には流出した土砂によって形成された平野部が広がっており、その境には阪神・淡路大震災をもたらした活断層が走り、震源となった淡路島の野島断層へと続いている。平野部では、湊川～生田川の流域より東側で扇状地が良く発達するのに対して、これより西では扇状地の発達が悪く、低平な土地が広がっている。

新湊川の右岸に立地する御船遺跡もこうした低平な沖積地の縁辺部付近に位置する。この湊川の流域変更が行われる前は、鶴越の谷奥から苅藻川が南下して流れを刻み、遺跡の背後から式内社である長田神社付近にかけて舌状の扇状地を形成した。御船遺跡は、この扇状地の末端に立地することになる。

第2節 歴史的環境

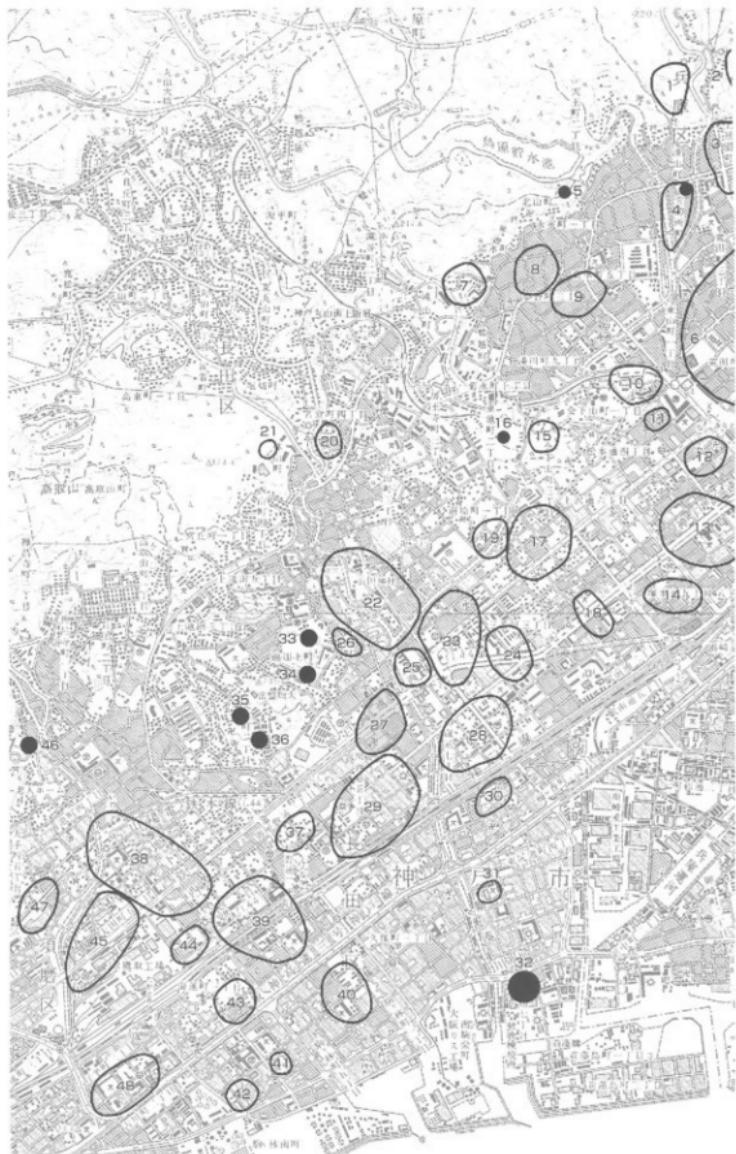
旧石器時代では兵庫区の会下山遺跡⁽¹⁾でサヌカイト製の国府系ナイフ形石器が採集されているが、周辺には他にこの時代の遺跡は見あたらない。

縄文時代では、中期以前の土器が発見されている遺跡は祇園遺跡⁽²⁾、名倉町遺跡⁽³⁾、長田南遺跡⁽⁴⁾など数少ないが、後晩期になると大開遺跡⁽⁵⁾、上沢遺跡⁽⁶⁾、五番町遺跡⁽⁷⁾、三番町遺跡⁽⁸⁾、松野遺跡⁽⁹⁾、戎町遺跡⁽¹⁰⁾など多くの遺跡で流路などから土器が発見されている。晩期末には突帯文土器と弥生時代前期の土器が共伴する例も多い。しかし、遺構の発見された事例は楠・荒田町遺跡⁽¹¹⁾や長田神社境内遺跡⁽¹²⁾などまだ少数にとどまる。

弥生時代には、東方の湊川流域では前期古段階の環濠集落が発見された大開遺跡⁽⁵⁾、前期～後期の堅穴住居跡や中期の方形周溝墓群が発見された楠木・荒田町遺跡^{(11)・(12)}など、この地域で中核的な集落が成立する。西方の妙法寺川流域でも前期の水田が発見された戎町遺跡⁽¹⁴⁾が中期以降も盛行し、西摂津地域では最西端の拠点集落と考えられている。これに対して、苅藻川流域では長田南遺跡⁽⁴⁾で中期の堅穴住居跡が発見されているものの、弥生時代の遺跡はまだ少ない状況である。

弥生時代後期～庄内併行期になると、前述の拠点的な集落は縮小し、各河川流域で新たな集落が成立する。苅藻川流域でも上沢遺跡⁽⁶⁾や長田神社境内遺跡⁽¹²⁾に統いて御藏遺跡⁽⁵⁾、神楽遺跡⁽¹⁶⁾などの集落が盛行する。湊川流域では祇園遺跡^{(2)・(18)}や兵庫松本遺跡⁽¹⁹⁾が、妙法寺川流域では松野遺跡⁽⁹⁾や若松町遺跡、大田町遺跡⁽²⁰⁾などを挙げることができる。しかし、古墳時代前期になると、これらの遺跡は一部を除いて衰退してゆく。

古墳時代中期～後期には、再び集落が増大し盛行するようになる。苅藻川と妙法寺川のほぼ中間に位置する松野遺跡^{(9)・(20)}からは、豪族居館あるいは神殿と考えられる複列で囲まれた掘立柱建物が発見され、その南側には掘立柱建物と堅穴住居で構成される集落が展開する。掘立柱建物と堅穴住居による集落は、神楽遺跡⁽⁵⁾や湊川遺跡⁽²¹⁾でも発見されており、この他、上沢遺跡^{(22)・(23)}、三番町遺跡⁽²⁷⁾（苅藻川流域）や大田町遺跡⁽²⁰⁾、鷹取町遺跡⁽²⁸⁾（妙法寺川流域）など、この時期の集落遺跡は多い。



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

第4表 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	天王谷遺跡	13	大開遺跡	25	長田南遺跡	37	水笠遺跡
2	祇園神社裏山遺跡	14	坂本遺跡	26	池田広町遺跡	38	戎町遺跡
3	祇園遺跡	15	会下山遺跡	27	御船遺跡	39	松野遺跡
4	雪御所遺跡	16	会下山二本松古墳	28	御藏遺跡	40	二葉町遺跡
5	夢野丸山古墳	17	上沢遺跡	29	神楽遺跡	41	長田野田遺跡
6	楠・荒田町遺跡	18	水木遺跡	30	東尻池遺跡	42	長田本庄町遺跡
7	熊野遺跡	19	室内遺跡	31	苅藻遺跡	43	若松町遺跡
8	河原遺跡	20	名倉遺跡	32	念佛山古墳	44	千歳遺跡
9	菊水町遺跡	21	林山古窯址	33	池田古墳群	45	大田町遺跡
10	東山遺跡	22	長田神社境内遺跡	34	池田古墳群	46	得能山古墳
11	兵庫松本遺跡	23	五番町遺跡	35	池田古墳群	47	現町遺跡
12	湊川遺跡	24	三番町遺跡	36	池田古墳群	48	鷹取町遺跡

先述のように、湊川～妙法寺川流域では古墳時代前期の集落の衰退傾向が指摘されているものの、各河川の水系ごとに平野を見下ろす丘陵上には、首長墓と考えられる前期古墳が築造される。湊川流域の夢野丸山古墳⁽³⁰⁾、苅藻川流域の会下山二本松古墳⁽³¹⁾、妙法寺川流域の得能山古墳⁽³²⁾である。続く中期古墳では、苅藻川河口左岸に全長180mの前方後円墳とも推定されている念佛山古墳⁽³³⁾があつたが、市街地化の波にのまれ現在はその姿をとどめていない。また、後期古墳も苅藻川西方の丘陵上の池田古墳群の他、夢野丸山古墳の位置する丘陵南側、念佛山古墳周辺などに群集墳が存在したと伝えられているが、内容はほとんど知られていない。

奈良時代には、官道である山陽道が整備され、御船遺跡を横断する「西代通り」を、そのまま東西に延長する直線的なルートが推定されている。その沿道には上沢遺跡^{(34)・(35)}、御藏遺跡⁽³⁶⁾、神楽遺跡⁽³⁷⁾、大田町遺跡^{(38)・(39)・(40)}など官衙色の濃い造構や遺物が発見されている遺跡が集中しており、大田町遺跡は「須磨駅家」の候補地として注目されている。

平安時代でも奈良時代から継続する遺跡が多いが、平安時代も終わりに近づくと、この地域が日本の政治の中心として歴史の表舞台に登場することとなる。即ち、平清盛が日宋貿易の拠点づくりとして行った「大輪田泊」の改修、平家一門の別邸建設、そして源平の争乱の中で強行された治承四年（1180）の福原遷都である。これらを裏付ける考古学的な知見は、これまでほとんど得られていないかったが、近年、ようやく一門の足跡をたどることができるようになってきた。楠・荒田町遺跡⁽⁴¹⁾の大型掘立柱建物と二重塼、その北に位置する祇園遺跡⁽⁴²⁾の圓池を伴う庭園跡は、平家一門に関連する遺構と考えられている。しかし、大輪田泊や福原京の位置については、いまだ確定するに至っていない。

平家滅亡によって改修が中断した大輪田泊は、鎌倉時代の僧、重源によって再び改修され、港湾都市「兵庫津」へと発展してゆく。また、官道としての古代山陽道は次第に廃れるものの、西国街道へと継承され、この地域は陸上交通と海上交通の要路として重要な位置を占めるようになる。兵庫津遺跡^{(42)・(43)}では、町屋群や石組基礎をもつ倉庫の発見、豊富な出土品によって港湾都市としての繁栄が実証されつつある。

平安時代末～鎌倉時代には、楠・荒田町遺跡⁽⁴⁴⁾、大開遺跡⁽⁴⁵⁾、上沢遺跡^{(46)・(48)}、長田神社境内遺跡⁽⁴⁹⁾、御藏遺跡⁽⁵⁰⁾、松野遺跡⁽⁵¹⁾、二葉町遺跡⁽⁵²⁾、若松町遺跡⁽⁵³⁾、戎町遺跡⁽⁵⁴⁾など多くの遺跡で中世村落の成立がみられる。市街地での調査ゆえ、その全体像は容易には知り得ないが、掘立柱建物や井戸、堀などで構成されており、二葉町遺跡や御藏遺跡では屋敷墓と考えられる遺構も発見されている。

参考文献

- (1) 神戸市立考古館 1979 「縄文人のくらし」
- (2) 須藤 宏 1996 「紙製遺跡第1次調査」『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (3) 直良信夫 1943 「神戸市名倉町出土の縄文土器片」「近畿古代文化叢考」
- (4) 塩田 敦 2001 「長田南遺跡第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (5) 前田佳久 1993 「大畠遺跡発掘調査報告書」 神戸市教育委員会
- (6) 阿部敏生他 1995 「上沢遺跡発掘調査報告書」 神戸市教育委員会
- (7) 松林宏典 1997 「五番町遺跡第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (8) 口野博史他 1994 「三番町遺跡第2次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (9) 口野博史他 2001 「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」 神戸市教育委員会
- (10) 山本雅和 1989 「戎町遺跡発掘調査報告書」 神戸市教育委員会
- (11) 丸山 肇 1980 「楠・荒田遺跡発掘調査報告書」 神戸市教育委員会
- (12) 黒田恭正 1990 「長田北遺跡第13次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (13) 丸山 淳 1997 「楠・荒田北遺跡第13次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (14) 山本雅和他 1992 「戎町遺跡第4次調査」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (15) 畠山直人他 2003 「伊弉諾遺跡 第5・7・11～13・18～22・24・28・29・31・33～36・39・41・43次発掘調査報告書」 神戸市教育委員会
- (16) 中川 渉他 2001 「神奈遺跡第11次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (17) 西岡誠司 2001 「紙製遺跡第7次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (18) 西岡誠司 2002 「紙製遺跡第8次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (19) 松林宏典 2001 「兵庫松本遺跡第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (20) 千種 浩 1983 「松野遺跡発掘調査報告書」 神戸市教育委員会
- (21) 山田清朝 2000 「若松町遺跡」 神戸市教育委員会
- (22) 藤井太郎 2001 「大田遺跡第12次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (23) 渡辺伸行他 1987 「神楽遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (24) 西岡巧次 1989 「藤川遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (25) 石島三和 2000 「上沢遺跡発掘調査報告書 第35次調査」 神戸市教育委員会
- (26) 塩田 敦他 2000 「上沢遺跡第9次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (27) 東喜代秀他 2000 「三番町遺跡第8次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (28) 森内秀造他 1994 「大田遺跡発掘調査報告書」 兵庫県教育委員会
- (29) 大井 茂 1991 「鷹取町遺跡」 兵庫県教育委員会
- (30) 梅原末治 1928 「神戸沿夢原9山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二編
- (31) 黒田恭正 1989 「今下山・本松古墳」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (32) 梅原末治 1925 「神戸市板宿御能山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二編
- (33) 斎谷美宜 1989 「市街地にえられた古墳＝今下山古墳」『神戸市立博物館紀要』第6号
- (34) 斎木 敏也 1999 「上沢遺跡第3次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (35) 斎木 敏 1999 「上沢遺跡第4次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (36) 谷正俊他 2003 「御園遺跡V」第26・37・45・51次調査 神戸市教育委員会
- (37) 菅本宏明 1981 「神奈遺跡発掘調査報告書」 神戸市教育委員会
- (38) 口野博史他 1994 「大田町遺跡第2次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (39) 東喜代秀他 1997 「大田町遺跡第5次調査」『平成6年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (40) 関田一也 2005 「楠・荒田町遺跡」『平成15年度 年報』 兵庫県教育委員会
- (41) 富山直人 2000 「紙製遺跡第5次発掘調査報告書」 神戸市教育委員会
- (42) 内藤俊也 2000 年 「中世の兵庫津の町並み」「歴史と神戸」第39巻第2号 神戸市学会
- (43) 深江英憲他 2004 年 「兵庫津遺跡II」 兵庫県教育委員会
- (44) 深江英憲他 1998 「楠・荒田町遺跡」 兵庫県教育委員会
- (45) 富山直人 1995 「大羽遺跡第4次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (46) 橋崎清孝 2001 「上沢遺跡第20次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (47) 斎木 敏 2001 「上沢遺跡第25次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (48) 斎木 敏 2001 「上沢遺跡第27次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (49) 莪田佳久他 1999 「長田神社境内遺跡第6次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (50) 川上厚志 2000 「二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9次調査」 神戸市教育委員会
- (51) 口野博史 2001 「若松町遺跡第2次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- (52) 山口正英 1999 「戎町遺跡第15次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会

第3章 北1・2区の調査

第1節 遺構の概要

北1・2区では、上下二つの遺構面があり、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡1棟の他、溝や自然流路、水田状区画を発見した。これらの遺構の大部分は、古墳時代でも後期に収まると考えられる。それぞれの遺構面と発見された遺構との対応関係は、出土遺物を検討した結果、調査時の認識とは異なるものとなっている。

下層遺構面では、調査区の西半に掘立柱建物跡1棟と溝3条がある。溝のうちSD02は掘立柱建物跡の長軸とほぼ方向が揃う（第3図）。

上層遺構面では、北2区の東半でおおむね北から南へ蛇行あるいは分岐して流れる複数の自然流路（SD03～07）が重なり合って走行し、その西側に5mほどの間を置いて竪穴住居跡1棟と水田状区画がある（第4図）。

自然流路は、地形的に最も低い位置を流れしており、蛇行や分岐が顕著であることから、人為的に掘削された溝ではないと判断した。北西から南東の方向に向かった後、蛇行して南へ下るSD03・04と、北東から南西の方向に向かった後、分岐して南南東方向に屈曲するSD05～SD07に大別できる。

竪穴住居跡と水田状区画は一角が重なり合っており、その切り合い関係から、竪穴住居跡のほうが新しいことが知れる。また、出土土器の特徴から、竪穴住居跡よりも自然流路のほうが埋没時期は新しいと判断した。



第3図 下層の遺構配置

第2節 層序

北1区の南壁で基本的な層序を見ると、まず、上半部分はコンクリートや煉瓦の基礎によって擾乱されているが、遺構面まで達するものは一部を除いて小範囲に限られている。周辺の市街地化が進む前の耕土（2層）は、標高9mほどの高さに所々残存しており、この段階ではほぼ均一な高さとなっている。

しかし、下層遺構面（⑦層上面）の時期には、東西方向では両端が高く、中央のSD03に向かって緩やかに傾斜している。また、南北方向では、北側が高く、北1区と北2南の境あたりから南に向かって高度を下げる。

下層遺構面のベース層となっているのは、調査区の西端で標高8.4mの高さにある黒褐色のシルト混じり砂疊層（⑦層）である。この層は北1区西端では細粒化し、褐灰色のシルト質細砂層に変化している。また、北1区南壁でみると下層遺構面のベースとなる層は一様ではない。SD03を境に東側では、黄灰色の砂質シルト層がSD03に向かって粗粒化し砂疊層に変化している。西側ではSD03のすぐ隣では、上面に円形の小さな窪みが多数ある黒褐色の粗中砂質シルト層（図版3）が分布しているが、擾乱の西側では粗粒化している。

このような下層遺構面の凹部を埋めるように褐灰色のシルト質細砂層（7層、⑥層）が、調査区の西半を中心堆積し、旧地表面の平坦化が進行していることがうかがえる。

堅穴住居跡や水田状区画が発見された上層遺構面は、これらの層をベースとしており、標高8.4m前後の高さにあるが、SD03周辺では、なお、これよりわずかに低い状態が残っていたようである。

SD03など上層遺構面の溝は、下層遺構面のベース層まで堀下げないと、その輪郭を見つけること



第4図 上層の遺構配置



第5図 北1・2区土層断面

はできなかった。しかし、土層断面を再検討した結果、SDO 3 の西肩は、北 1 区南壁の 7 層上面まで立ち上がるるものと考えられる。東肩については占墳時代後期の遺物包含層（9 層）を切り込んでいることは確実であるが、8 層上面まで立ち上るのは難しいと判断した。SDO 3 以東に広がる 8 層は、SDO 3 を含む一連の溝の最終堆積物と考えることができる。

なお、下層遺構面より下位では、標高 7 m 付近にある厚さ約 40 cm の黒色シルト層（⑩ 層）を挟んで、上下に砂疊層や砂層が堆積していることが断ち割りで判明している。

しばしば、洪水による土砂が流入し、一時的には湿地状となるような環境下にあったことがわかる。

第3節 下層遺構面の遺構と遺物

1. 遺構

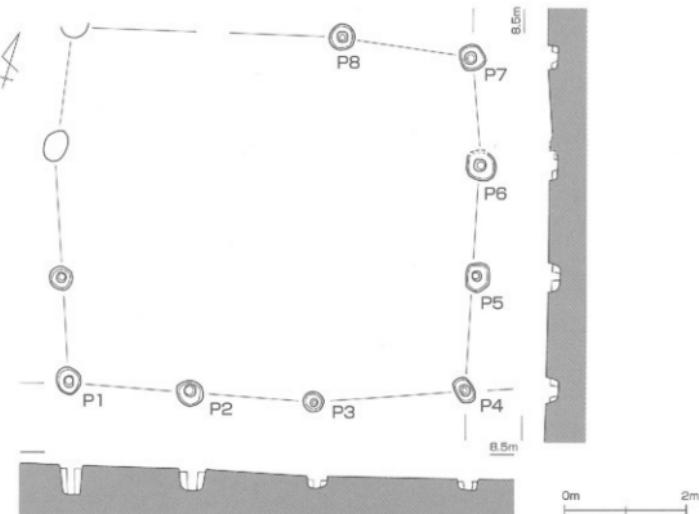
下層遺構面で発見された遺構には掘立柱建物跡 1 棟と溝 2 条がある。いずれも調査区の西端近くに寄った位置にあり、掘立柱建物跡の西辺は調査区内では最も高い位置を占める。

SBO 1 (第 6 図 図版 8)

北 1 区と北 2 区にまたがって発見された掘立柱建物跡で、ちょうど調査区内に全体が収まる。主軸を



写真 1 北 1 区南壁の SDO 3 断面



第 6 図 SBO 1

N 75° Eに向ける東西棟の側柱建物で、3間(6.5 m)×3間(5.5 m)の規模を有す。柱間は桁行きで2.0～2.5 m、梁行きで1.7～2.1 mとなる。柱の通りは一直線上にのらず、各辺とも中央が少し外に張り出し、やや中膨れの平面形をとる。

柱穴は掘り方が径40 cm前後あり、一部を除き、それぞれのはば中央で径20 cmほどの柱痕を確認した。柱穴の深さは20～50 cmで、標高の高い西側ほど深く、東側の柱ほど次第に浅くなっている。これに対して、柱穴底面の標高は7.8～7.9 mで、東辺ではよく掘り、南辺では西から東に向かって徐々に浅くなっている。

遺物は、外面をハケ調整し内面にケズリのある土師器甕の体部破片が柱穴から1点出土しているだけである。

S D O 1 (図版3)

北1区の西端を斜めに走向する幅70 cm、深さ35 cmの

小規模な溝である。西側は調査区外に延びるが、東側は攪乱で途切れてしまっている。S B O 1 の柱穴に切られており、その前後関係が分かる。

溝内から土師器壺(1)が出土している。

S D O 2 (第7図 図版7)

S B O 1 にはば平行して、北2区の南北隙を斜めに走向する溝である。S B O 1 の南辺とは約2.5 m離れている。幅0.85～1.2 m、深さ約40 cmのU字溝で、部分的に片側が二段掘りされている。

埋土は4層に分かれ、下部には黒褐色のシルト質～シルト混じり砂層(2～4層)が堆積しており、下位ほど粗粒である。最上部の灰褐色シルト質砂層(1層)は下層遺構面全体を被覆する層である。

遺物は出土していない。

2. 遺 物

下層遺構面では、出土遺物が乏しく、固化しうるものはS D O 1 出土の1点のみである。

S D O 1 出土遺物 (第8図1)

土師器壺が出土している。

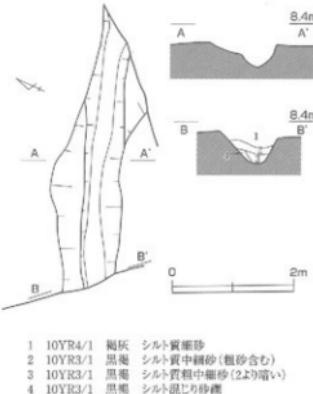
1はいわゆる小型丸底壺で、口縁部を欠く。器壁は厚めで、内面はユビでナデ上げている。

第4節 上層遺構面の遺構と遺物

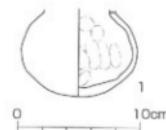
1. 遺 構

上層遺構面で発見された遺構には水田状区画、堅穴住居跡1棟、自然流路5条がある。水田状区画と堅穴住居跡は調査区の西寄りに、自然流路は東寄りにある。

水田状区画 (第9図 図版4)



第7図 S D O 2



第8図 S D O 1 出土土器

北2区の西寄りで、小さな長方形の区画が一列、南北方向に並んでいる。区画は北側にも続いているが、北1区の調査時には、その存在に気づかず、南壁断面での分層もしなかった。最も北側の区画の標高は約8.3mであり、北1区南壁の7層の中程に当たる（第5図）。区画の中は、細粒のシルト質砂層で被覆されており、特に中央の2つの区画では、畦畔部分の粘質土層との違いは明瞭であった。しかし、これより東側では粘質層が広がり、区画を認識することはできなかった。西側では、水田土壤層自体が次第に薄くなり、消えてしまう。

この区画を水田と即断するには、広がりや水配りの点で疑問もあり、ここでは水田状区画と呼んでおく。

区画の大きさは、全体の形状の分かる中央の二つで、長さ約4m、幅2m前後となる。その南の細長い三角形状の区画は、長さ3m足らず、最も広いところでも幅は1mに満たない。この3つの区画は、幅20~30cmの畔で仕切られているが、これより北側あるいは南側の区画との間は1m以上空いている。

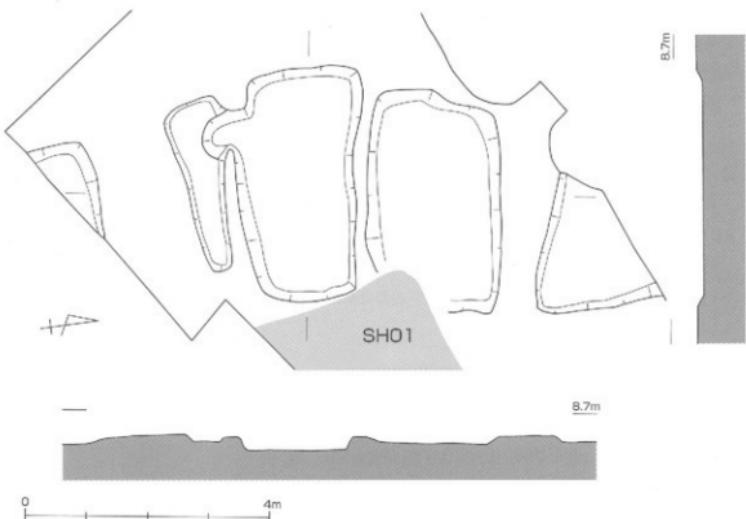
次に、区画された各面の高さを見ると、北側から3区画目までは順に低くなっているが、次の細長い区画は高くなり、幅広い畔を経て、再び少し下がる。

遺物は出土していない。

SHO1（第10図 図版9）

水田状区画の東側にあり、その一角を切って、掘り込まれている。方形の竪穴住居跡で、南側約半分は調査区外に続くものの、コンクリート基礎で破壊されてしまっている。北辺は3.5mあるが、東辺は少し外開きとなっており、平面形は台形状になるかもしれない。深さは浅く10cmほどに過ぎない。

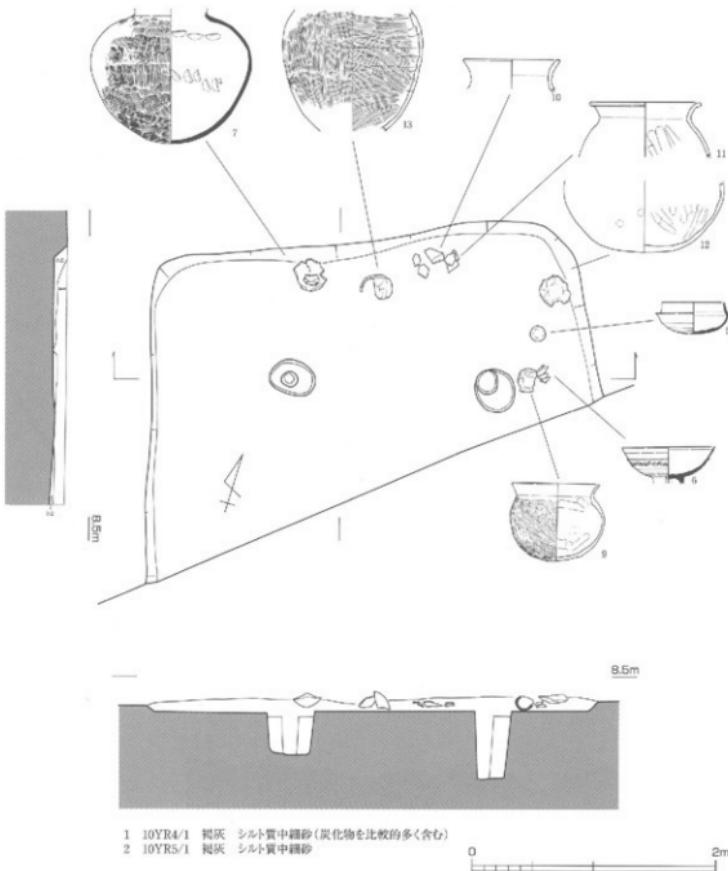
埋土は2層に分層したが、特に目立った違いはない。周壁溝は認められなかった。



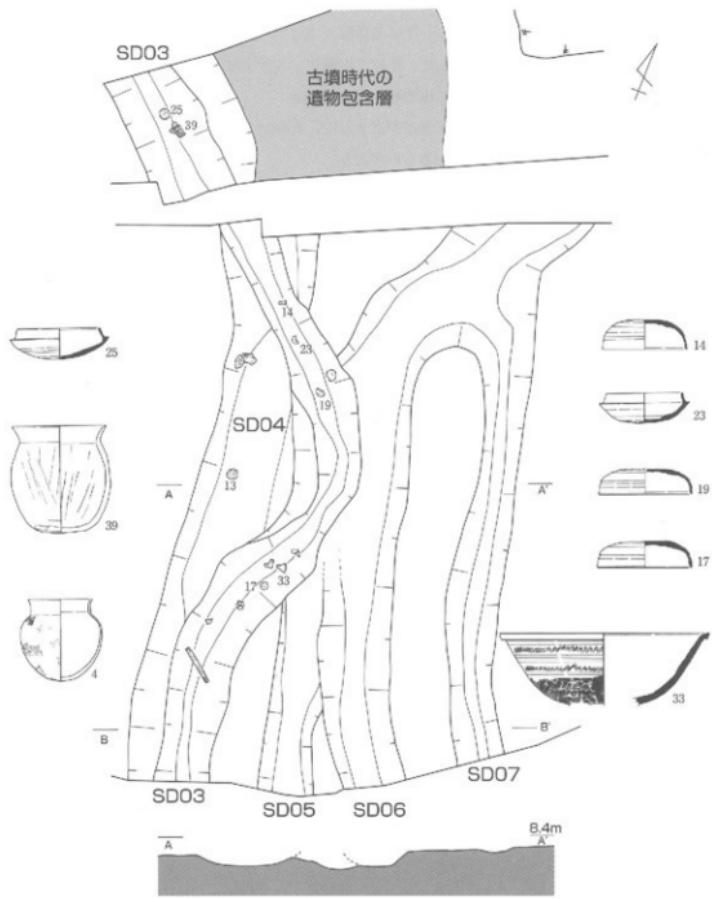
第9図 水田状区画

主柱穴は4つと考えられ、2つが調査区内にある。このうち床面で確認できたのは西側の1穴で、東側は下層遺構面上で発見したのである。下層遺構面では周辺に組み合う柱穴が無く、聚穴住居跡との位置関係からその主柱穴の一つと判断した。主柱穴の掘り方の径は約30cm、深さは西側で35cm、東側は55cmとかなり深い。ともに、径約15cmの柱痕を確認した。

住居跡の床面からは完形のものを含む土器が出土した。土器の一部は、住居跡を確認した時点ですでに姿を見せており、上部が削平されているものがある。



第10図 SHO 1



0 4m

第11図 SD03~07

土器は北辺と東辺の2群に分かれて置かれている。まず、北辺の中央に左から須恵器壺（7）と土師壺（13）が1つずつ並び、2個体以上の土師器壺が続く（10・11）。7は壊えた状態で出土しており、口縁部は削平により失われていた。13は底部の破片が無く、底を抜いた状態で据えられていたのかも知れない。10、11は接合できなかったがどちらかの底部破片も出土している。東辺では、北東隅近くに土師器壺（12）が据えられ、そこから主柱穴の方に向かって、須恵器壺（5）、須恵器高壺（6）と小型の土師器壺（9）が並ぶ。

土器の大部分は床面よりもわずかに浮いた位置にあるが、大型の壺類は底を下にして、据えられた状態で出土している。炭化材などが出土しておらず焼失住居ではないが、土器は住居跡の廃絶後に投棄されたのではなく、何らかの事情で遺棄されたものと考えられる。

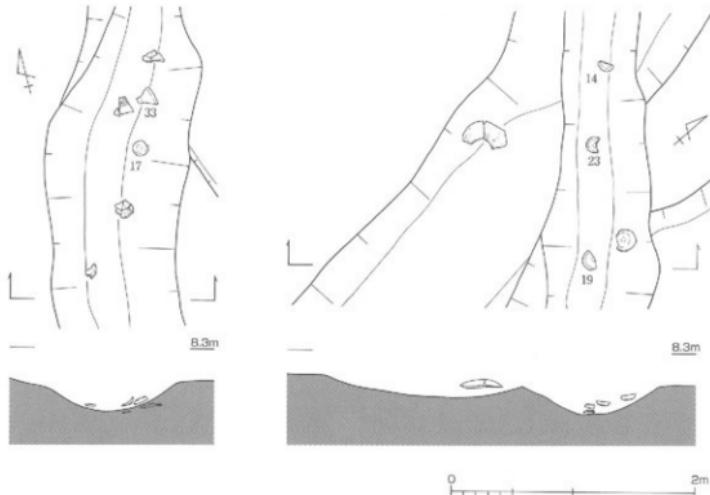
これ以外では、埋土中からの出土は少なく大部分は小片であった。

S D 0 3・0 4（第11・12図 図版3・6）

S D 0 3は幅約1m、深さ約40cmあり、北西から南東の方向に向かった後、蛇行して南へ下る。埋土は、最下層に黒色の砂質土があり、上層には灰色系の細粒シルト質土の堆積が認められた。

S D 0 4は、S D 0 3より幅広いが、半分くらいの深さしかない浅い流路である。北1区ではS 0 1と重なっていたと考えられるが、調査時には別の流路があるという認識はなかった。北2区ではあまり蛇行せず南へ下り、再び、S D 0 3と重なっている。埋土はS D 0 3の上層と類似する。北2区南壁の土層断面観察の結果、S D 0 3を切っていると判断した。

S D 0 3の底近くからは、完形に近いものを含む須恵器壺を中心に、碗、罐、提瓶、高壺、器台、土師器壺など多くの土器が出土し（14～42）。S D 0 4からも須恵器壺、壺、土師器壺などが出土している（2～4）。



第12図 S D 0 3遺物出土状況

S D 0 5 ~ 0 7 (第 11 図 国版 6・7)

S D 0 5 ~ 0 7 は S D 0 3・0 4 よりも新しい一連の流路である。

S D 0 5 は 幅 1 m、深さ約 15 cm の流路で、S D 0 6 に切られている。

S D 0 6 は 幅 約 1 ~ 1.2 m、深さ約 20 cm の流路で、北東から南西の方向に向かった後、南南東方向に屈曲する。深さは南ほど浅くなっている。

S D 0 7 は、幅 60 ~ 90 cm、深さ 10 cm 足らずの浅い流路で、S D 0 6 から分岐し平行して南へ下る。

これらの流路の埋土は類似しており、黄灰色のシルト質砂層の堆積が認められるが、S D 0 6 では、下部に砂礫層が認められる。

S D 0 6・0 7 からは、古墳時代後期の須恵器や土師器が出土しているが、実測しうるものはなかつた。

2. 遺 物

S H 0 1 出土遺物 (第 14 図 5 ~ 13)

須恵器坏身、無蓋高坏、壺と土師器高坏、甕が出土している。

5 は 須恵器坏身で完存している。底部は丸みをもち、2 / 3 以上を回転ヘラケズリしている。口縁部の立ち上がりは比較的長く、受け部はほぼ水平に伸びる。口縁端部は内傾して段をもち、端面はこころもち窪んでいる。口径 10.0 cm に対して、高さは 5.2 cm あり、口径に対して器高が高い。

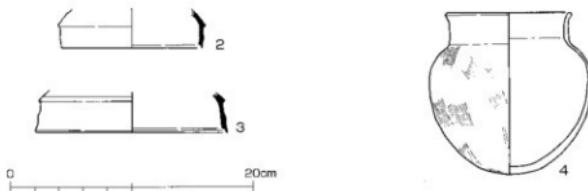
6 は 須恵器無蓋高坏である。坏部はやや丸みをもち一段薄くなった口縁部が斜め外方に伸びる。口縁部端面は丸く仕上げるが、内面に幅の広い段をもつ。外面は口縁部と体部の境にやや丸みのある凸帯を巡らせ、その下を波状文で飾る。脚部には 4 方向に長方形の透かしを穿つ。

7 は 須恵器甕である。体部中央より少し上に最大径があり、外面の平行タクキは、上半部は横方向の後縦方向に、下半から底部にかけては不定方向に施す。内面には半月形に無紋のアテ具痕が残る。正置された状態で出土しており、口縁部は後世の削平時に失われたものであろう。

8 は 土師器高坏の脚柱部である。外面にはユビオサエの痕が残る。

9 ~ 13 は 土師器甕である。9 は 小型の甕で歪な球形の体部をもち、口縁部は外反する。体部外面はハケを、内面はヘラケズリを施す。11 と 12 は、内面がヘラケズリではなく、下から上へ強くユビナデしている。12 も 7 と同じく正置された状態で出土している。13 は 長胴形の甕で、内面には粘土紐の接合痕が段差となって明瞭に残る。内外面とも粗いハケが施されている。

これらの S H 0 1 出土の遺物は、出土状況から一括性が高いものと考えられる。須恵器坏身の特徴か



第 13 図 S D 0 4 出土土器

ら、TK23～TK47型式期に位置づけられるであろう。

S D O 4 出土遺物（第13図2～4）

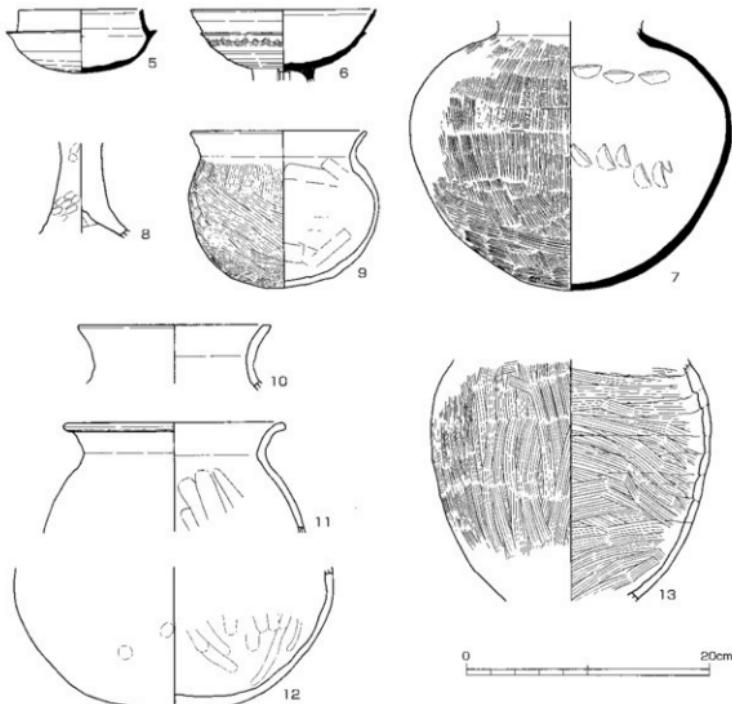
須恵器壺蓋と土師器甕が出土している。

2・3は須恵器壺蓋でいずれも小片である。2は口径が11.5cmと小さく、天井部と口縁部を画する稜は鋭さを欠く。口縁端部は内傾し、段をもって凹面をなす。3は口径が15.6cmと大きく、天井部と口縁部を画する稜は鈍い。口縁端部は内傾し、段をもって凹面をなす。外面のヘラケズリは後の近くにまで及んでいる。

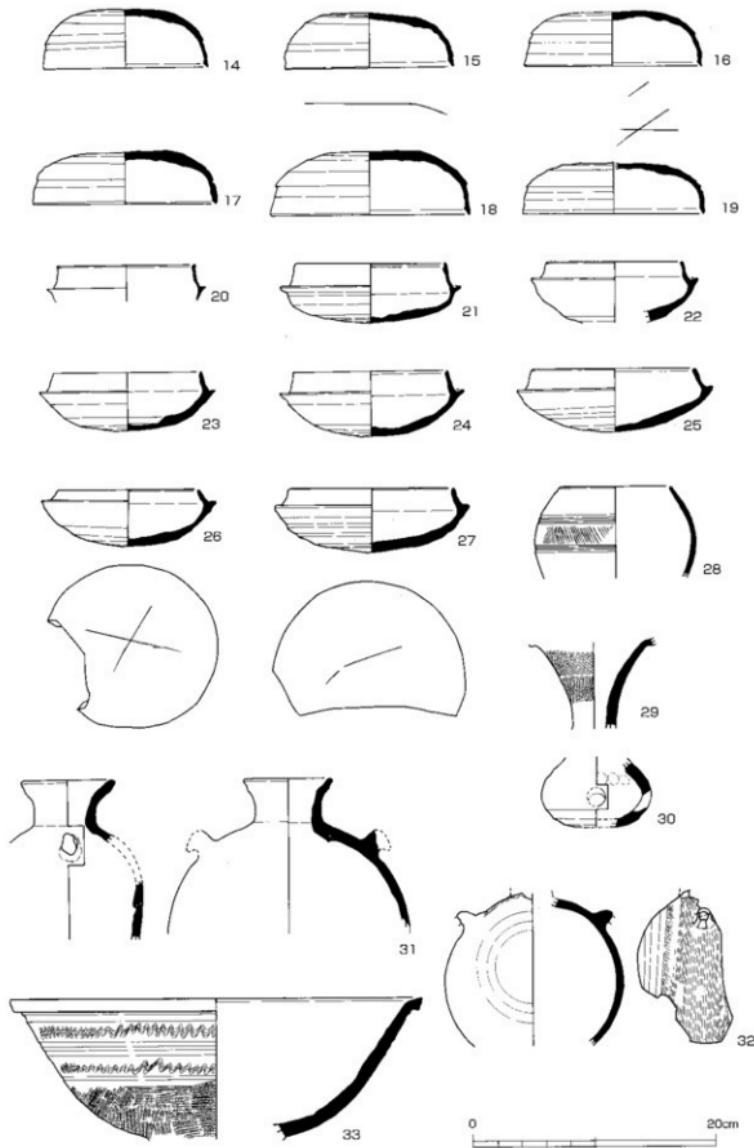
4は小型の土師器甕で、直立気味の口縁をもつ。器壁が荒れて調整痕の残りは悪が、体部外面はハケメが所々に残る。内面は板ナデであろうか。

S D O 3 出土遺物（第15～17図14～42・S1）

北1・2区の中では、最も多くの遺物が出土した遺構である。土器・土製品では須恵器壺蓋、碗、甕、提瓶、器台、壺、甕、土師器高杯、甕、須恵質の土錐が出土している。また、石器では砥石が1点出土している。



第14図 SHO 1 出土遺物



第15図 SD 03出土土器 (1)

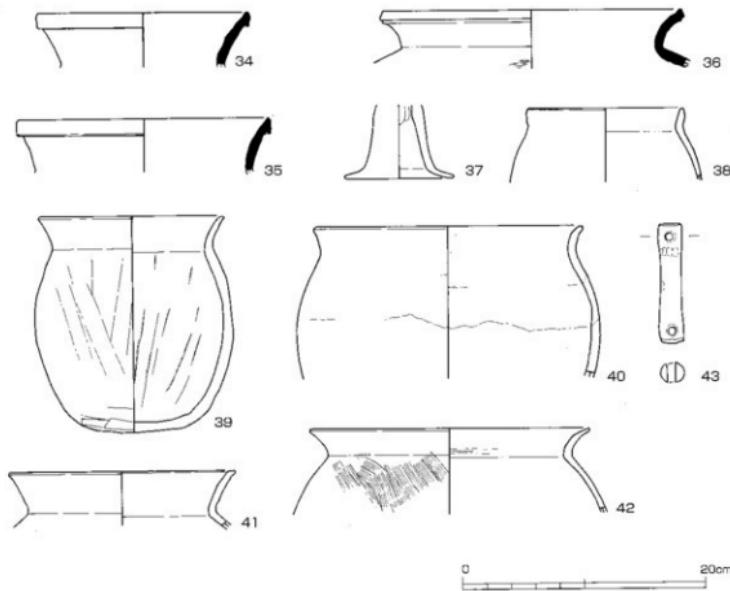
14～19は須恵器壺蓋である。天井部は比較的平坦で、天井部と口縁部を画する後は鈍いものと、ナデによる相対的な稜をもつものがある。口縁端部は内傾し、端面はわずかな凹みがみられる。15～17・19は、口径が14cm前後、器高は4.0～4.5cmに収まるが、14はこれより少し径が小さく器高が高い。18は口径16.2cm、器高5.2cmあり、一回り大きくなる。天井部のヘラケズリの範囲は18を除いて狭い。15と18には、天井部の見込みにタタキのアテ具痕が残り、18と19は、天井部にヘラ記号がある。

20～27は須恵器壺身である。口径12cm前後で器高が5cm未満のもの(21、23、26)、これより少し大きく、口径12.5cm前後で器高が5cmを少し越えるもの(24・25・27)が主体を占めるが、口径11cm前後でやや小型のもの(20・22)もある。口縁部は全般に内傾して立ち上がるが、20は立ち上がりが長くやや直立気味となるのに対して、26は大きく内傾する。口縁端部は、内傾する面をもつもの(20・21・24)と丸く收めるものがある(22・23・25～27)。20は他に比べ薄手のつくりで、異質な感がある。21には見込みにタタキのアテ具痕が残り、26と27は底部外面にヘラ記号がある。

28は須恵器碗である。体部中央と口縁部との境に2条の凹線を引き、その間にヘラ書き直線文を飾っている。

29・30は須恵器鼈である。同一個体の可能性があるが、接合できなかった。口縁部には2段に渡って細かな波状文を施す。体部は下影れで、円孔より下が回転ヘラケズリされている。

31・32は須恵器提瓶である。31は口縁部が外反し端部は丸く收める。体部には鉤状把手が付く。32は31よりも少し小型で、やはり鉤状把手が付く。体部の片面には回転ヘラケズリを施し、側面はタタ



第16図 SD03出土土器(2)

キが残る。他の片面にはカキ目を施す。

33は須恵器器台である。台部は丸みをもった底部から斜め外方に立ち上がり、端部は外方に折り曲げ面を作る。台部上半は3段の凹線で区画し、間を波状文で飾っている。下半には平行タタキが認められる。

34・35・36は須恵器蓋である。34・35は口縁部がゆるやかに上方へ伸び、端部は折り返し外方に面をもつ。36の口縁部は短く外反し、端部は面を作る。口縁部直下はナデにより凸帯状となる。

37は土師器高坏の脚部である。筒状の脚柱部から裾部が大きく開く。

38～42は土師器壺である。38の口縁部はわずかに外に開き、39・40では緩く外反する。いずれも端面は丸く取める。39の底部は平底に近く、底部外面はヘラケズリを施す。体部の調整は内外面とも縱方向の板ナデもしくはハケである。40もハケあるいは板ナデ調整と思われるが、粘土體の接合痕が残る。41・42は屈曲する口縁部をもち、41は上方に端面をもつ。42の外面はハケ調整である。なお、39・42は胎土に金雲母を多く含む。

43は須恵質の土錐である。手握ねで成形されているためやや歪な円柱状を呈し、中央部が心持ち細くなっている。両端近くに縫通し用の穿孔がされ、一方の孔の近くにはユビオサエの跡が残る。

S1は砥石である。凝灰岩と思われる細粒で緻密な灰白色の石を用いている。径1mmの砂粒が含まれており仕上げ砥には少し不向きかもしれない。砥面は表裏左右の4面あり、断面形は整った長方形となる。表側の砥面には、左隅から斜めに入った刃物によるキズが数条残る。

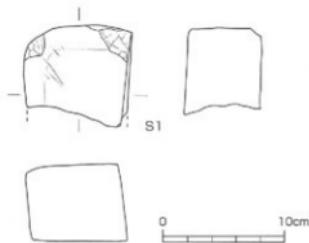
これらのSD03出土遺物のうち、須恵器蓋坏には20の様に古相を示すものも含まれるが、大半はTK10型式期に位置づけることができる。その他の須恵器もほぼ同時期に収まると考えられよう。

第5節 包含層出土の遺物

包含層出土の遺物には、土器と土製品がある。土器は古墳時代後期のものが大半を占めるが、弥生時代後期や古墳時代前期のものもわずかながら見られる。

44は弥生土器壺の底部破片である。体部外面には右上がりのタタキが施され、底部周辺にはユビオサエの跡が残る。北1区の下層遺構面ベース層である砂礫層中から出土しており、弥生時代後期のものである。

45は、口縁部が内彎しつつ立ち上がる布留式壺である。体部外面のハケメは細かく、頸部直下には横方向のハケを施す。内面はヘラケズリである。胎土には金雲母を多く含む。44と同じく北1区の下層遺構面ベース層である砂礫層中から出土しており、この層が



第17図 SD03出土石器

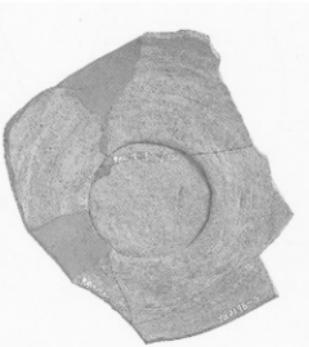
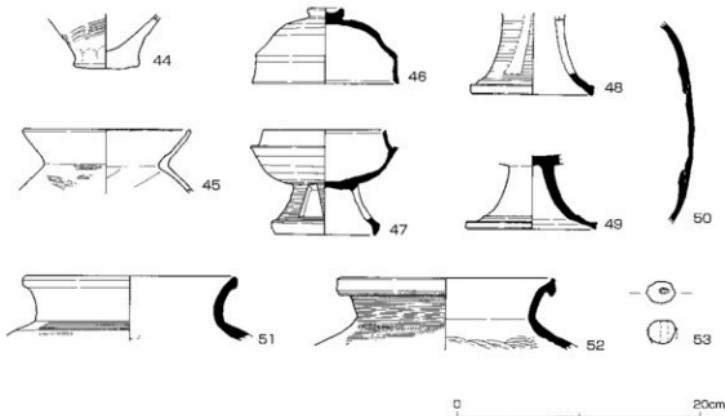


写真2 提瓶(50)の円盤充填痕



第18図 包含層出土の土器

古墳時代前期以降に形成されたものであることがわかる。

46は須恵器高坏の蓋である。天井部は高く、扁平な突起が付く。体部と口縁部を分ける後は鈍く、口縁部は内傾する端面を持つ。北1区のSD03東側に分布する遺物包含層（北1区南壁9層）から出土したもので、層位的にはSD03よりも古い。

47～49は須恵器高坏である。47は丸みのある坏部と内傾して立ち上がる口縁部をもち、端面は内傾する。脚部は短く広がり脚端部は下方に拡張して端面を作る。坏部の回転ヘラケズリは体部上方まで及び、脚部にはカキメを施す。透かし孔は長方形で3方に開ける。48は高坏の脚部で、脚端部は端面をつくる。カキメが施され、長方形の透かし孔を3方に開ける。46と同じくSD03東側の遺物包含層から出土した。49は低脚の高坏脚部で、裾部は大きく広がり端面をもつ。透かしではなく、裾部には凸帯がつく。坏部の見込みには仕上げナデが施されている。

50は須恵器提瓶の体部破片である。円整充填の痕を留める。

51・52は須恵器壺である。外反する口縁部をもち、51では端部が肥厚して面をもつ。体部の調整はタタキで、肩部にはカキメを施す。52は端部を上下に拡張させている。体部をタタキで成形した後、頸部までカキメを施す。

53は土師質の土錘と考えられるものである。直な球形を呈し、棒状のものを差し込んで穿孔している。

第6節 小 結

北1・2区では、下層造構面からは掘立柱建物跡と溝が、上層造構面からは堅穴住居跡、水田状区画、流路が発見された。

下層造構面の造構は出土遺物が少なく、時期を特定することは困難であるが、下層造構面のベース層から出土している遺物に、布留式壺が含まれていることから、少なくとも、これよりも新しい時期を与

えることができる。このことは、S D 0 1 から出土した小型丸底壺によても裏付けられよう。

上層遺構面では、出土した須恵器の特徴から、竪穴住居跡は T K 23 ~ 47 型式期に廃棄され、流路のうち最も遺物量が多かった S D 0 3 は T K 10 型式期以降に埋没したことが想定される。また、遺構の切り合い関係からは、水田状区画を下層遺構面の掘立柱建物跡などと上層遺構面の竪穴住居跡との間に時期に位置づけることができる。

したがって、北 1・2 区での遺構の変遷を述べるならば、次のようになろう。まず、古墳時代前期以前の時期に掘立柱建物が建てられるが、それが廃絶した後、堆積したシルト層に水田状の区画が設けられる。水田状区画がシルト質細砂層で被覆されて埋没すると、古墳時代後期にはそこに竪穴住居が建てられる。流路は竪穴住居と同時に廃棄後には、多くの土器が投棄されている。

御船遺跡のこれまでの調査で、古墳時代後期の集落が発見されているのは、神戸市教育委員会の第4次調査のみで（西岡ほか 2001）、調査地点は、北 1・2 区から北東に約 150 m 離れた新湊川に近いところである。その間に位置する第2次調査地点と北 3 区（第4章参照）では、古墳時代後期の遺構は発見されておらず、住居が広範囲に集中するのではなく、いわば散村的なありかたを示す。これは、新湊川に近いことから避けず洪水の危険があり、大きな集落が形成できなかつたためかもしれない。

ところで、水田状区画という曖昧な表現は、その面積があまりに小さい点、検出できた広がりが狭いものである点などによる。さらに、水田とすれば、最初に居住域として利用されていた場所が一時的に生産域となり、再び、居住域になるという土地利用の変遷を考えなければならなくなるという点も、水田と断定しきれなかった理由である。

もちろん、竪穴住居跡が後世の削平を受けていることが明白なように、当時の生活面（地表面）がそのまま残っているわけではない。水田状区画も、本来はもっと広範な広がりをもっていたのかもしれない。それとは別に、調査時の判断が誤っていて、掘立柱建物跡と水田状区画の前後関係が逆になる可能性もある。そうすると、単純に生産域から居住域へ変遷したことになり、より自然な変化とみることができる。北 1・2 区の北側に位置する第2次・第4次調査地点では、遺構の時期は異なるものの、水田跡が埋没した後に掘立柱建物跡などが建てられている事が層位的に確かめられており、北 1・2 区でも同じ変遷をたどった可能性も残されている。

今回の調査は層位的関係を十分にはとらえきれず、導き出された遺構の変遷も曖昧なものとなってしまった。調査区の北側には流路に土器を投棄した人々の居住域があるはずであり、今後、周辺の調査が行われるならば、水田状区画の性格や掘立柱建物跡との関係などが明らかにされることを期待したい。

参考文献

西岡誠司ほか 2001年 「御船遺跡 第4次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会

第4章 北3区の調査

第1節 遺構の概要と層序

北3区では、地表下約90cmに1面の遺構面があり、古墳時代前期および鎌倉～室町時代の土坑や溝などが発見された。これらはすべて同一の遺構面上で発見した。古墳時代の遺構には調査区の中央付近で発見された浅い土坑（SK02～05）があり、調査区の長辺に沿って北東～南西の方向に並んでいる。また、鎌倉時代の遺構には調査区北壁の東端近くで発見された土坑群（SK01他）がある。両者の間にある溝（SD01～SD03）は、出土遺物や埋土の色調などから中世以降のものと考えられる。

調査区南壁で基本的な層序を見ると、まず、上半部分はコンクリートや煉瓦の基礎によって擾乱されている。1層と2層は、このコンクリート基礎を埋設する際の擾乱層と考えられる。

調査区の西半には旧耕土層と考えられる褐色土（3層）が広がっているが、漆川に近い東側は中世以降の堆積物で高くなっていたせいか、旧耕土層は認められず、鉄分の沈着によって幾分か黄色味を帯びたシルト質土層（9～11層）が、比較的厚く堆積している。西半では3層下にはやや白っぽいシルト質土層（7層）が広がっている。この下位にあって西半に分布する12層は、上層とは異なり褐色味の強い層である。遺構面は11層および12層の直下にあり、黄褐色系のシルト質土（14層など）をベースとする。新漆川に近い東側から西側に向かって緩やかに傾斜しており、遺構面の標高はおよそ8.8m（東側）～8.7m（西側）となる。



写真3 北3区南壁断面

第2節 遺構と遺物

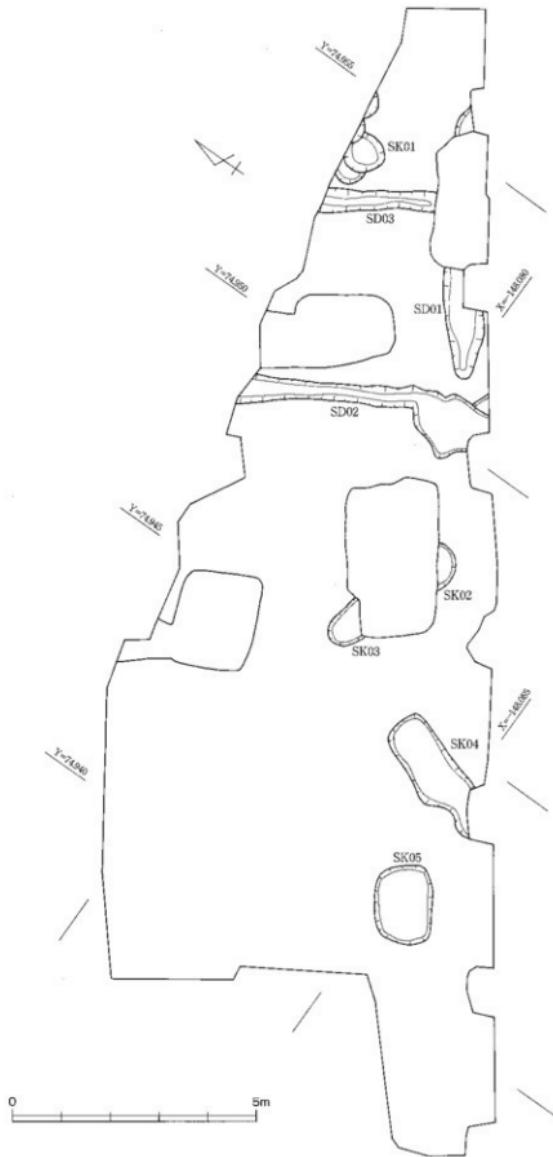
1. 遺構 土坑

土坑は8基を数えるが、古墳時代前期に属すると考えられるもの4基（SK02～05）と鎌倉～室町時代（14世紀代）に属すると考えられるもの4基（SK01他）に分かれる。

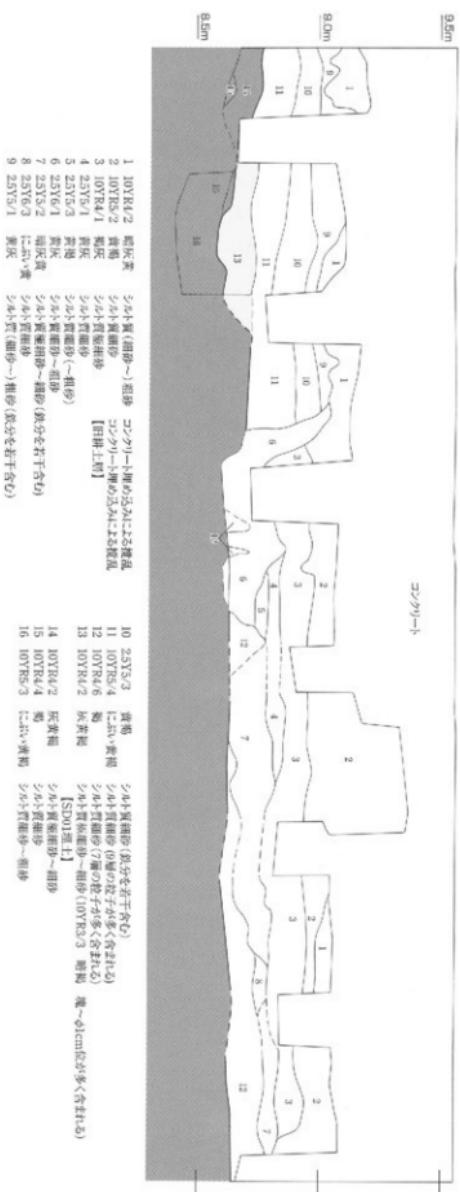
古墳時代の土坑は、調査区南辺に沿って並び、いずれも深さが10cm以下の浅いものである。SK02、03の遺物出土状況から、これらの土坑は上部が大きく削平されていると考えられる。SK01他は、これらとは離れた調査区の北壁際に集まるが、うち2基は断面でのみ確認したものである。

SK02・03（第21図 図版11）

調査区の中央付近に設けていた試掘トレーンチ2の両脇で発見された土坑である。いずれも、トレーンチ



第19図 北3区全体図



第20図 北3区南壁土層断面

の掘削の際に一部を掘り下げてしまっております。それぞれ残存部は半分程度である。

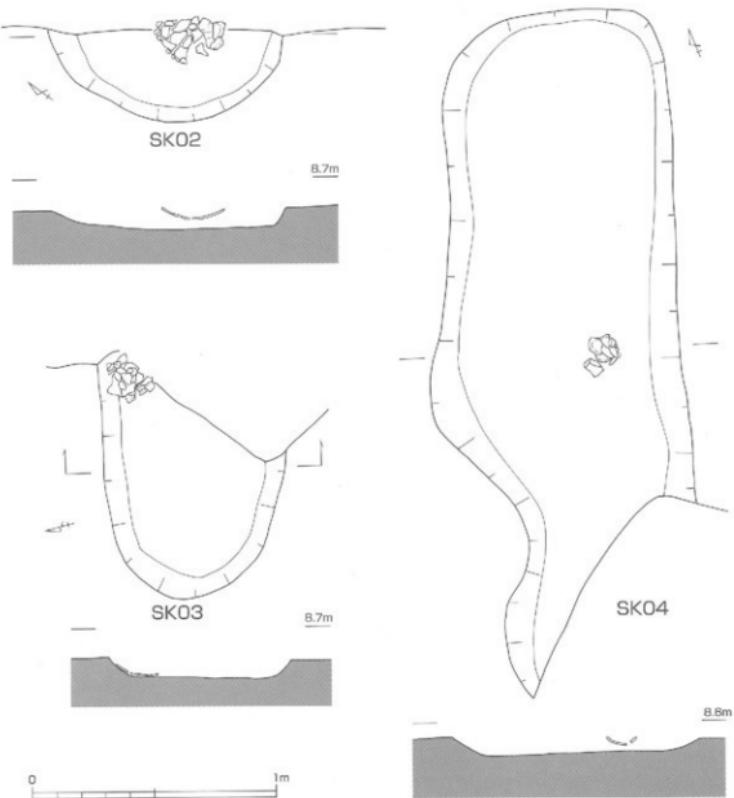
SK02の残存部は径1m弱の半円形で、深さは10cmに満たない。土坑の底近くからは内面をヘラケズリした土師器壺の体部破片が出土している。

SK03は、SK02の斜め向かいにあり、短径80cm弱、長径1m以上の橢円形の土坑である。北辺の底部からは古墳時代の土師器壺が2個体出土した(54・55)。

二つの土坑はトレンチ2を挟んで相対する位置にあり、深さも同程度であることから、本来は一つの細長い土坑であった可能性もあるが、トレンチ掘削時にはそうした観察はできていない。一つの土坑とすれば、長さ3.1m、幅1mほどに復元できる。

SK04(第21図 図版11)

SK02・03の南西にあり、長辺の片側が大きく波打った長方形状の土坑である。一端が調査区外



第21図 SK02~04

に伸びるため、長さは 2.8 m 以上となり、幅は形の整った部分で幅 90 cm 余りある。深さは 10 cm に満たない。底部中央付近からは外面を粗いハケ調整した土師器壺の体部破片が出土した。

SK05 (第 22 図)

最も南西側に位置する土坑で、長さ 1.65 m、幅 1.2 m の隅丸長方形をした土坑である。深さは SK02 ~ 04 よりさらに浅く 5 cm である。遺物は出土していないが、位置や埋土の状況などから SK01 ~ 04 と同時期の遺構と判断した。

SK01 (第 22 図 図版 12)

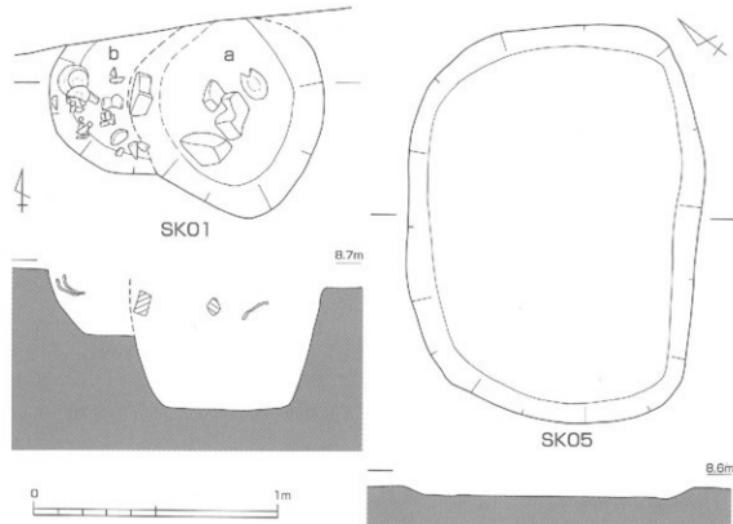
調査区北辺の東寄りの壁際にあり、当初、一つの土坑と判断していたが、完掘後、深さの違う二つの土坑が重なり合っていたことが判明した。東側を SK01a、西側を SK01b と呼び分ける。さらに、東側に連続して二つの土坑あるいは柱穴と考えられる遺構が続いていることを断面で確認した。この 2 基は南肩のごく一部分が調査区内にかかるだけで、形状や規模などは不明である。

SK01b は、径約 80 cm の不整な円形を呈し、深さは 50 cm あり、ほぼ真っ直ぐに掘り下げられている。これに大きく切られている SK01a も同程度のものと推察されるが、深さは約 25 cm と SK01b の半分程度である。

土坑の最上部からは土師器皿 (56 ~ 65) と鉢 (66)、一辺 20 cm 程の角礫が出土し、皿の一部は重ねて置かれていたものがあった。遺物は 1 点を除いて、SK01b から出土しているが、角礫はすべて SK01a から出土している。

溝

溝は 3 条あり、SK01 に近い調査区の東半に集まる。約 3.5 m の間隔を置いて併行する 2 条 (SD



第 22 図 SK01・05

02・03)と、これらに直交する1条である(SD01)。いずれも深さ10cmほどの浅い溝で、方向性と埴土の類似から同時期の溝と考えられる。

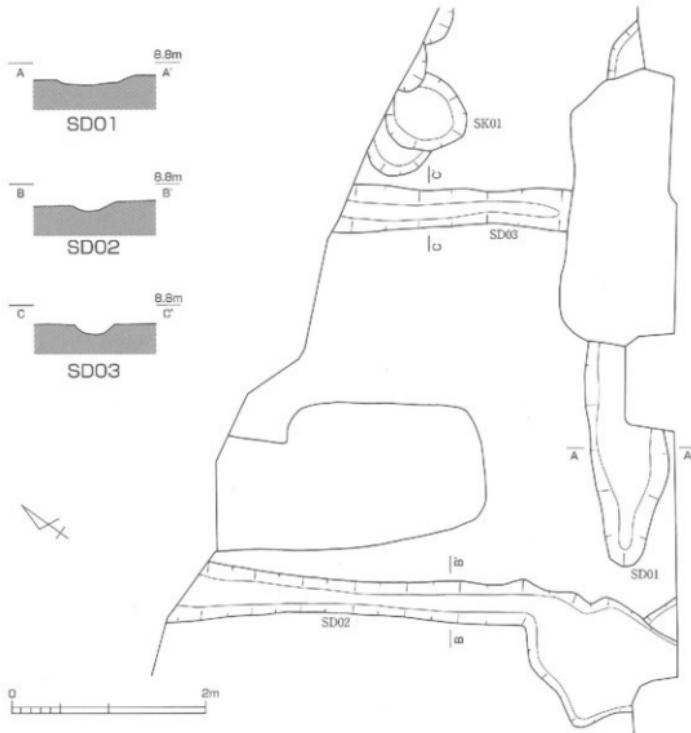
SD01(第23図)

調査区の南辺に平行する溝である。N 55°Eを向き、SD03とは交差すると思われるが、試掘トレンチ1によって関係は不明となっている。幅約80cm以上、深さ約10cm、長さは6m以上になろう。遺物は須恵器の小片が1点出土しているだけである。

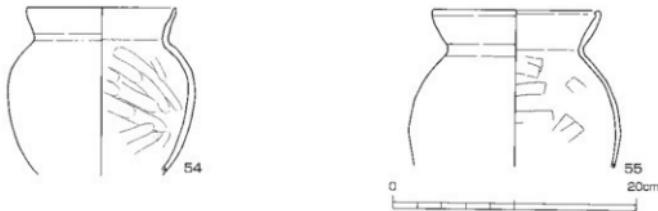
SD02・SD03(第23図)

調査区の南辺に直交する溝である。SD03はN 33°Wを向き、約3.5mの間隔を置いてSD02がほぼ平行に並ぶが、南東側で少し広がる。ともに幅約40cm、深さ約10cmの小規模な溝である。SD02の南東側は形状が崩れているのは、南壁の6層によるものと思われるが、埴土は類似しており、平面的に区別できなかった。

遺物は須恵器と上部器が少量ながら出土しており、時期が分かるものとしては、12世紀代の東播磨



第23図 SD01~03



第24図 SKO 3出土土器

系須恵器捏鉢の小片がSD 02から出土している。

2. 遺物

SKO 3出土遺物（第24図54・55）

土師器壺が出土している。

54は、小型の壺である。肩部に最大径があり、口縁部は軽く外反する。摩滅のため外面の調整は不明であるが、内面は下から上へユビでナデあげる。

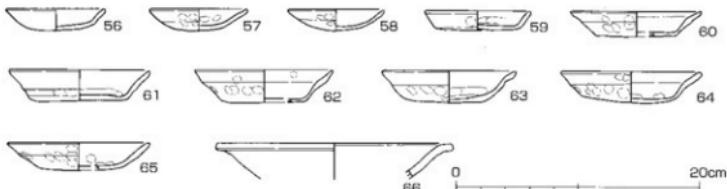
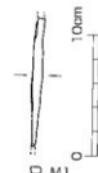
55は、小型の布留式壺である。丸みをもった体部から口縁部が外反し、壺部は内側に肥厚する。摩滅のため外面の調整は不明であるが、内面はハラケズリで器壁を薄くしている。布留Ⅱ式に相当する。

SKO 1出土遺物（第26図56～66）

出土した遺構はaとbに分かれるが、取り上げ時には区別していなかったので、一括して報告する。土師器皿と鉢が出土している。 第25図 包含層出土金属器

56～65は、土師器皿である。口径8cm前後、器高1.5cm前後の小皿（56～59）と、口径11cm前後、器高2.5cm前後の一回り大きな皿（60～64）に分かれる。これらの皿は、いずれも手捏ね成形されており、体部下半にはユビオサエの跡を残すものが多いが、上半はナデ消されている。

前者では、丸みのある底部からやや内彎気味に口縁部が立ち上がるものの（56～58）と平らで広い底部から口縁部が斜め外方に立ち上がるものの（59）がある。



第26図 SKO 1出土土器

後者では、平らな底部から体部が内彎気味に立ち上がり、口縁部が外に聞くものである。口縁部はやや内湾気味で、体部よりも少し厚みがあり、外面は強くヨコナデされる。

これらの土師器皿は、在地色の強い非輪縦系土師器であり、長谷川の分類による土師器皿Ⅱ B1b 類あるいはⅡ B2a 類に相当し、およそ 14 世紀代の所産と考えられる（長谷川 2004）。

66 は土師器鉢とした。口縁部の小片であり、もう少し深くなるかもしれない。

包含層出土遺物（第 25 図 M 1）

M 1 は棒状の鉄製品で、断面は長方形を呈し、両端は細くなる。

第 3 節 小 結

北 3 区で発見された遺構は古墳時代前期と中世の土坑や溝だけであり、密度は希薄なものであった。したがって、北 3 区の北東側約 20 m の隣接地を調査した神戸市教育委員会による第 2 次調査などの成果（池田 2000）を援用しながら、微地形と人間との関わり合いについて考えてみたい。

第 2 次調査では、2 面の遺構面があり、下層の第 2 遺構面からは弥生時代後期の水田跡が発見されている。その標高は、第 1 遺構面の SK 0 1 の断面図から、8.4 m 前後と推察される。つまり、弥生時代後期には自然堤防はまだ形成されておらず、後背湿地状の低地が広がっていたようである。この水田跡は調査区の南半では、河道状堆積によって削平されてしまっているが、その状態は我々の調査した北 3 区にも続いているようである。

こうした洪水性堆積物によって水田が埋没し、そこには、自然堤防が形成されてゆく。新たに出現した集落適地としての自然堤防に、初めて足を踏み入れたのは北 3 区の SK 0 2 ~ 0 5 を残した古墳時代前期の人々であった。しかし、確実に集落が出現するのは北 1・2 区でみたように、古墳時代後期まで待たねばならない。

神戸市調査による上層の第 1 遺構面では 7 世紀後半～11 世紀後半の掘立柱建物跡、溝、土坑、井戸などが発見されている。第 1 遺構面の標高は、SK 0 1 の断面図を参考にすれば、およそ 8.85 m となり、これが、自然堤防の高さをある程度反映していると考えられる。北 3 区の遺構面よりも 5 ~ 15 cm ほど高く、7 世紀後半～11 世紀後半の集落は、自然堤防上のより高い位置に営まれているようである。しかし、そこには、14 世紀代の遺構は認められないようである。北 3 区の SK 0 1 は、現状では単独の遺構として存在しているに過ぎず、周辺における同時期の集落の存在などは不明である。

参考文献

- 池田 敦 2000年 「御船遺跡 第 2 次調査」 「平成 9 年度神戸市埋蔵文化財年報」
長谷川 真 2004年 「土師器・土師質土器」「兵庫津遺跡Ⅱ」 兵庫県教育委員会

第5章 南地区の調査

第1節 層序と遺構の概要

南地区における現況の地形は主に近現代の盛土によってなされたものであり、ほぼ全域にわたり厚さ0.8～1.4 mの盛土が存在している。第28図ではこの盛土を省略し、旧表土以下の層位についてのみ図示している。

盛土直下には旧表土である旧耕土層があり、現況のように市街地化する前は調査対象地が耕作地であったことがわかる。以下旧耕土層と思われる灰色系の土層と鉄分に沈着した黄褐色系の土層が互層となり数面続いている。暗褐または灰黄色のシルトから細砂層が南地区全域に堆積し、この層が古墳時代から中世の遺物を含む遺物包含層となっている。遺物は層位的に分けられるものでなく各時代の遺物が混在した状態で出土している。遺物包含層直下が遺構面となる。遺構面の時期は12世紀代が中心で、標高は概ね8.1～8.4 mである。南1区では30層の上面が遺構面であり、南2・3区では12層の上面が該当する。遺構面上には南3区では部分的に洪水紗が覆っている。検出した遺構は、南1区では築溝が多数認められたほか、方形を呈する土坑を検出している。南2・3区および平成11年度調査区ではほぼ連続する調査区であり、調査区を跨って掘立柱建物跡3棟、井戸1基などの遺構を検出している。

南1区において遺構面精査中下層より土器の出土をみたため、旧確認調査グリッド壁面の精査、さらに中世遺構面以下について遺構面の有無を確認するため東西方向にトレーニチを1ヵ所設定し、調査を行った。遺構面より下位の層序については36層以下が粘質シルトや粗砂層からなり、河道ないしは溜まり状の堆積もしくは洪水堆積によるものと考える。

南1区においては、遺構面以下の状況を見るための下層確認トレーニチを設け、結果的に弥生時代前期以前の沖積層を標高6.3 mの深さまで確認したことになる。なお、38層で弥生時代後期から末葉にかけての上器片を一定量検出した。36層からも弥生時代後期頃と考えられる小片を検出したが、本来切り込まれている37層ないしは38層に含まれていた可能性がある。40層で弥生時代前期の壺の破片を検出している。遺物の出土をみたものの、安定した堆積状態は認められないため南地区では中世を主体とした遺構面以下に遺構面の存在する可能性は低いと判断した。



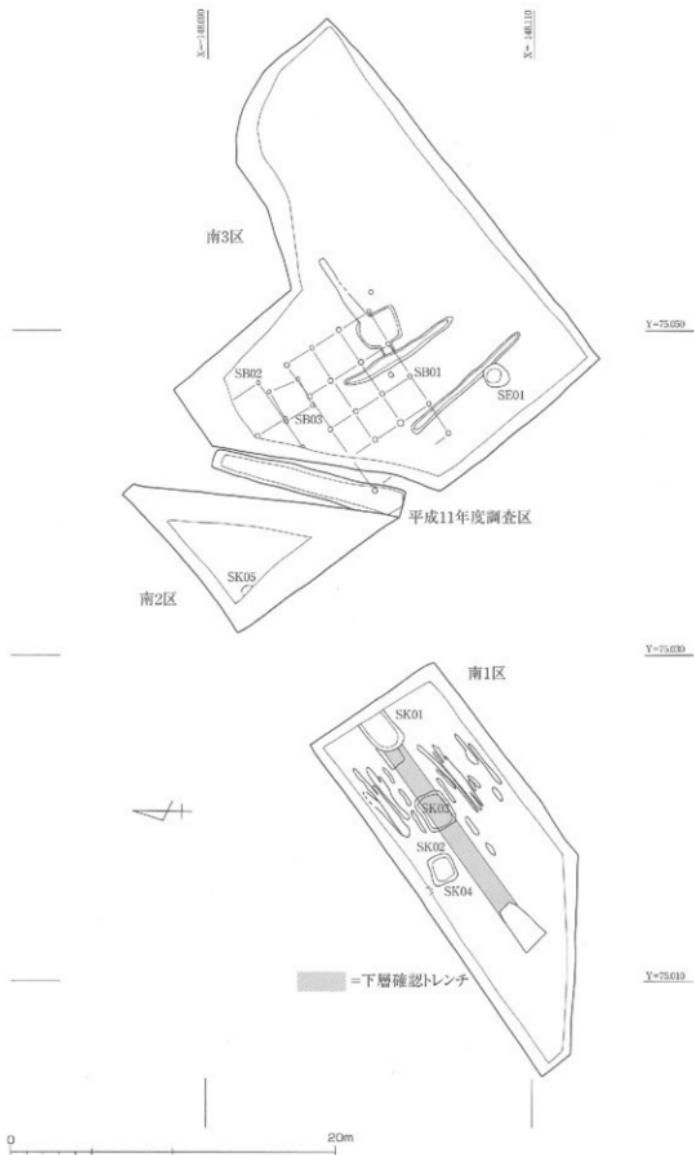
写真4 南地区調査風景

第2節 中世の遺構と遺物

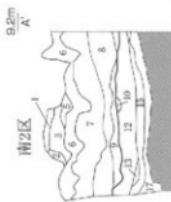
1. 遺構

掘立柱建物跡

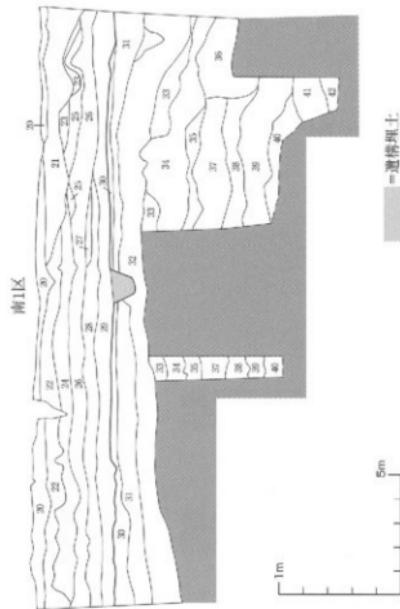
平成11年度調査区と南3区にまたがって検出した。SB01・02については一部の柱穴の並びに



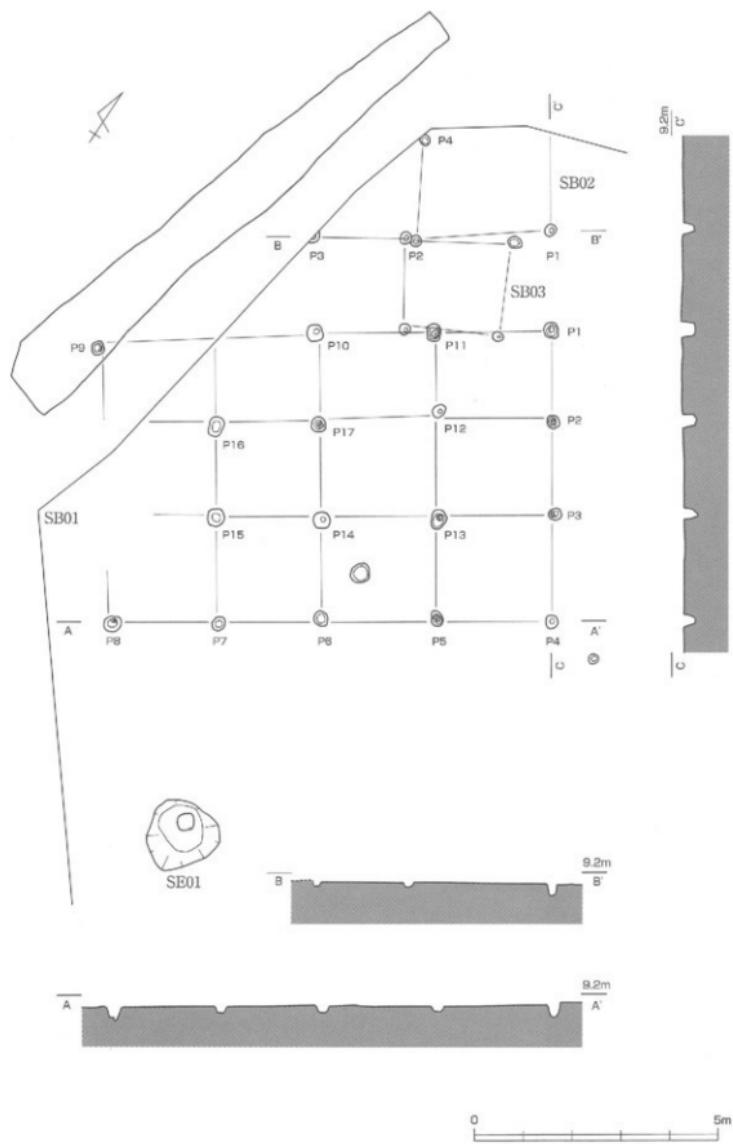
第27図 南地区全体図



1	25N7/2	灰黄	砂小混じ中～粗砂
2	25N7/1	灰白	粗砂～粗砂
3	73/7/1	明黄	粗砂～粗砂
4	107R6/6	灰白	粗砂
5	N8	灰白	粗砂
6	57/8/1	灰白	粗砂混じシルト
7	N6	灰	粗砂混じシルト
8	N6	灰	粗砂混じ中～粗砂
9	107R5/8	明褐	粗砂
10	107R5/3	1.2-3.5m濁泥	粗砂
11	37/5/2	灰ヤードー	粗砂～中砂
12	NS	灰	粗質シルト
13	NS	灰	粗砂混じシルト
14	NS	灰	粗質シルト
15	75YR6/8	暗	粗砂～細砂
16	107R6/6	明黄褐	粗質シルト
17	5R4/1	暗青灰	粗質シルト
18	EV4/1	灰	粗質シルト
19	10R5/1/1	暗青灰	粗質シルト
20	25/7/1	灰白	粗砂～細砂
21	107R6/6	明黄	粗砂～中砂
22	25/7/2	灰黄	粗砂～中砂
23	25/7/3	灰黄	粗砂～中砂
24	25/7/4	1.2-3.5m濁泥	粗砂～中砂
25	25/7/4	灰	粗砂～中砂
26	25/7/1	灰白	粗砂～中砂
27	25/7/1	灰白	粗砂～中砂
28	107R5/1	灰	粗砂～中砂
29	25/7/2	灰	粗砂～中砂
30	25/7/1	青灰	粗砂～中砂
31	107R4/1	青灰	粗砂～中砂
32	107R3/1	黑褐	粗質シルト～粘土質
33	25/7/1	黑褐	粗質シルト～粘土質
34	107R7/1	灰白	粗砂～中砂
35	107R6/1	灰白	粗砂～中砂
36	25/7/1	黑灰	粗質混じ中砂
37	25/4/1	黄灰	粗質シルト～粘土質
38	25/3/2	黑褐	粗砂～中砂
39	25/3/1	灰ヤードー	中砂混じ粗砂
40	5/3/2	灰	粗質シルト
41	37/5/1	灰	粗質シルト
42	N4	灰	粗質シルト



第28図 南地区土層断面



第29図 SB01・02

それが見られることから別の建物としたが、全体的な柱穴の並びや柱穴間距離などは近似しており、同一の建物である可能性を残す。今回の調査区内では掘立柱建物を構成する柱穴の他に柱穴はほとんど存在せず、柱穴の重複もほとんどみられないため、同じ場所で建物の建て替えなどは行われなかつたようである。

S B O 1 (第 29 図 図版 16)

平成 11 年度調査区と南 3 区にまたがつて検出した。調査区の制約により一部調査しえなかつた部分もあるが、平面的にはほぼ建物の全面を調査している。西側の柱穴列は検出できなかつたが、東西 4 間、南北 3 間の東西棟の純柱建物として復元できる。建物の桁行方向は N33° W を示す。

柱間距離は、南北方向は概ね 2 m を測るのに対し、東西方向は建物内部の間仕切りによるためか東側から 2.3 m、2.5 m、2.0 m と異なつてゐる。柱穴の平面形は円形または梢円形を呈し、径 25 ~ 40 cm、深さ 8 ~ 25 cm を測る。北西と南西隅の柱穴は掘方の底に川原石を根石として置いてゐる。

P13 は柱抜き取り後に須恵器椀 (67) を入れてゐる。他の柱穴からは遺物の出土はない。

S B O 2 (第 29 図 図版 16)

南 3 区北端で検出した。純柱建物で、東西 2 間、南北 1 間分を検出したのみで、建物の大半はさらに北側調査区外へ続くため全容は不明である。建物の桁行方向は N30° W を示す。P 2 と P 4 の並びが S B O 1 の P 5 ~ P 11 までの並びとずれがあることから別の建物としたが、P 1 は S B O 1 P 1 ~ P 4 の並びの延長線上にあり柱の通りはよいため、2 棟は同一の建物となる可能性がある。柱穴の平面形は円形を呈し、径 30 cm、深さ 4 ~ 11 cm を測る。

建物を構成する柱穴内から遺物は出土していない。

S B O 3 (第 30 図 図版 16)

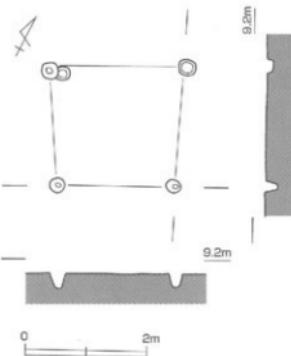
南 3 区北端で検出した。S B O 1・0 2 と重複し、柱穴の切り合いから本建物が S B O 2 に後出すると考える。東西、南北とも 1 間の建物である。建物の東西方向は N27° W を示し、他の建物と比較すると若干東に振れてゐる。柱穴間距離は東西、南北とも約 1.9 m を測る。柱穴は平面が円形を呈し、深さは 8 ~ 26 cm である。

建物を構成する柱穴内からは遺物は出土していない。

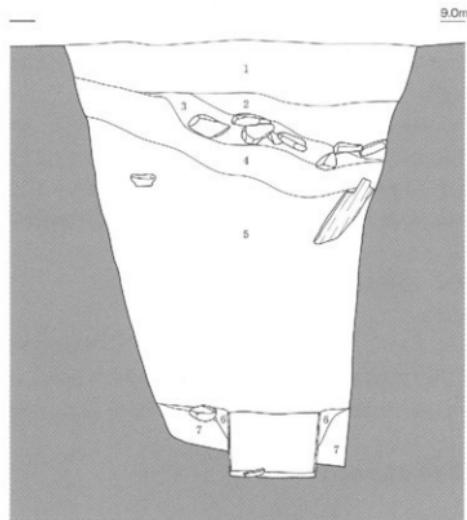
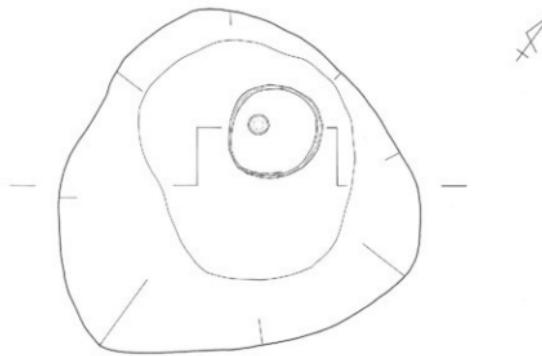
井戸

S E O 1 (第 31 図 図版 17)

S B O 1 の南側約 3 m の地点で検出した。おそらく掘立柱建物とともに屋敷地を構成するのであろう。掘方の平面形は歪な梢円形を呈し、径は 1.4 m × 1.5 m、深さは 1.5 m を測る。断面形は台形を呈する。井戸側材は一切認められない。底部の中央やや北よりに水溜として曲物を据えている。曲物は据えられた後、裏込めとして 10 cm 以下の繩を周囲に詰めている。なお水溜の底からは須恵器小皿 (68) が出土している。埋土は、上層には 10 cm 程度の繩、中層以下には板材などの木製品が多く混じり、屋敷廃絶時に一気に埋め立てられたものとみられる。



第 30 図 S B O 3



- 1 砂 粗砂混じり中砂
 2 砂 中砂混じり粘質細砂
 3 砂 粘質細砂
 4 砂 粘砂～中砂
 5 砂 中砂（やや粘質、木製品・土器を含む）
 6 オリーブ黒 粗砂混じり中砂（約6～10cm大の産含む）
 7 黒褐 粘質シルト



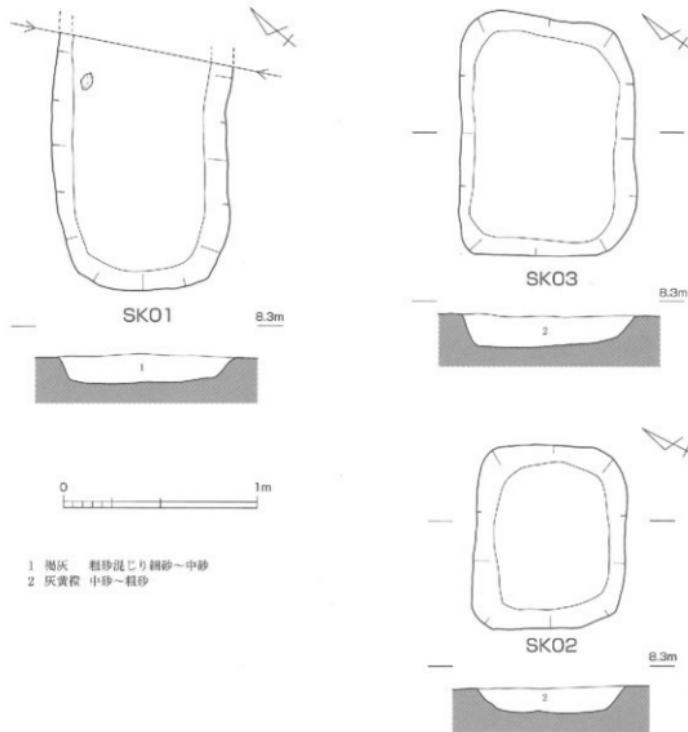
第31図 S E 01

土坑

南1区東半部から南2区および平成11年度調査区にかけて6基を検出した。うち3基については平面的に検出したが、残る3基は調査区の様面でのみで確認し平面的には検出していない。平面的に検出できた3基の土坑は、主軸を北東-南西方向に持ち、周囲で検出した掘立柱建物跡や廻溝などの遺構とほぼ同じ方向を示している。土坑はいずれも形状や規模が類似していることから、一群をなしていると考える。

SK01 (第32図 図版18)

南1区東端で検出した。平面形が隅丸方形を呈し、東側は調査区外へ続く。主軸はN53°Eにもつ。規模は検出長2.5m、幅1.8mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは20~30cmを測る。埋土には遺構構成土がブロック状に混じる。遺物は埋土内より須恵器底部(70)が、坑底より須恵器挽(69)が出土した。



第32図 土坑

SKO2 (第32図 図版18)

南1区の中央やや東よりに位置する。SKO1の西側約3mではば延長上にあり、主軸も同様にN53°Eにもつ。SKO3とは約1mの距離をおく。平面形は長方形を呈し、規模は長さ2.4m、幅1.8mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さは約30cmである。埋土はSKO1同様、遺構面構成土がブロック状に混じる。

遺物は須恵器・土師器の破片が埋土内より出土したのみである。

SKO3 (第32図 図版18)

南1区の中央部、北壁際で検出した。平面形は長方形を呈し、規模は長さ1.9m、幅1.5mを測る。主軸はSKO1・O2よりもやや東に振り、N67°Eにもつ。断面形はU字状を呈し、深さは25cmである。埋土には遺構面構成土がブロック状に混じる。

遺物は須恵器・土師器の破片がわずかに出土したのみである。

SKO4 (図版18)

南1区のSKO3の北側で検出した。壁面断面で検出し、平面的には検出していない。遺構の大半は調査区外へ続く。検出部分の規模は幅1.2m、深さ18cmを測る。埋土には遺構面構成土がブロック状に混じる。

SKO5 (図版18)

南2区の西壁断面で確認した土坑である。平面的には遺構の東端をわずかに検出しただけであり、遺構の大半は西側調査区外へ続いている。検出した部分の規模は幅1m、深さ25cmを測る。

SKO6

平成11年度調査区の南端付近、南壁断面で確認したものである。土坑の大部分は南側の調査区外に続いているとみられ、調査区内においては平面的には検出することができなかった。壁面で観察できた部分についての規模は幅40cm、深さ5cmを測る。埋土内には若干の炭が混じる。

溝 (第27図 図版14)

今回の調査区では建物を中心とした屋敷地を区画する溝は確認できなかった。

南1区では調査区東半部を中心に鋤溝を多数検出した。鋤溝はすべて東西方向にのびている。

南3区では東西・南北方向各1本の溝を検出した。これらは掘立柱建物跡と重複しているが、掘立柱建物跡を覆う洪沢砂上で検出したので、掘立柱建物より後出するものと考える。

出土遺物は、南3区SD01から須恵器捏鉢が出土した他は細片が若干出土したにすぎない。

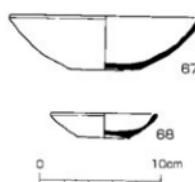
2. 遺 物

遺構から出土した遺物の大半は土器であり、須恵器・土師器・瓦器がある。SE01からのみ木器が出土している。土器は出土数量自体が少なく、大半は圓化しえない破片であった。良好な一括資料もみられない。

SBO1 P 13出土土器 (第33図67)

67は須恵器碗である。見込部のくぼみはほとんど消失している。糸切りの底部から内湾しつつ口縁部へいたる。端部は丸くおさめる。

SE01出土土器 (第33図68)



第33図 遺構出土土器(1)

68は須恵器小皿である。平底の底部から内湾ぎみに体部が開く。底部には糸切り痕が残る。器高が2.0cmあり口径と比較するとやや高い。

SE 01出土木器（第35・36図W1～W5）

W1～W3・W5は水溜に用いた曲物である。蓋あるいは底板の痕跡はないため、図は曲物本来の天地でなく、井戸戸水溜としての天地である。水溜は2段で構成され、下段内側にW2、その外側にW1を重ねる。W3はW2の上に積み重ねる。いずれも端部の重ね合わせ部分を棒皮紐で縫じた円形の曲物であるが、現状では変形し楕円形を呈している。また残存状況は縫じの部分も含めて良好でない。なおW2の曲物は破損が著しいため、縫じ合わせ部分の写真のみ掲載した。

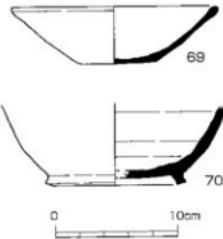
W1は長径41.0cm、短径38.5cmの楕円の平面形を呈するが、本来は径40cm程度の円形であろう。高さ6.0cm、板材の厚さは0.3cmを測る。底から0.9cmの位置に9.5～13.7cm間隔で穿孔された釘穴が10ヶ所あり、うち3ヶ所には木釘が残存する。端部は2列前内3段後内1段で左前にて縫じ合わせる。W2は長径39.2cm、短径36.4cmの楕円の平面形を呈するが、本来は径38cm程度の円形であろう。高さ4.3cm、板材の厚さは0.4cmを測る。底から0.5cmの位置に9.5～14.0cm間隔で穿孔された釘穴が10ヶ所ある。端部は2列前外2段後内1段で左前にて縫じ合わせる。内面にはタテ方向のケビキを入れ、部分的にこの上に斜めまたは斜格子状のケビキを入れる。W3は長径39.3cm、短径38.0cmの楕円の平面形を呈するが、本来は径38cm程度の円形であろう。高さ11.3cm、板材の厚さは0.45～0.55cmを測る。端部は1列外3段で左前にて縫じ合わせる。内面にはタテ方向のケビキを入れ、縫じ合わせ部分の左側のみこの上から斜め方向のケビキを入れる。

W4は漆椀である。口縁部は欠損し底部付近のみ残存する。全面的に摩滅し残存状態は良好でない。内外面ともに黒漆が塗られていたが剥離しており、その痕跡が残る程度である。

SKO 1出土土器（第34図69）

69は須恵器椀である。底部からは直線的に開き、口縁端部がやや肥厚し丸くおさめる。

70は須恵器底部である。体部は内湾ぎみに立ち上がる。底部には輪高台を貼り付けている。



第34図 遺構出土土器(2)

第3節 包含層出土の遺物

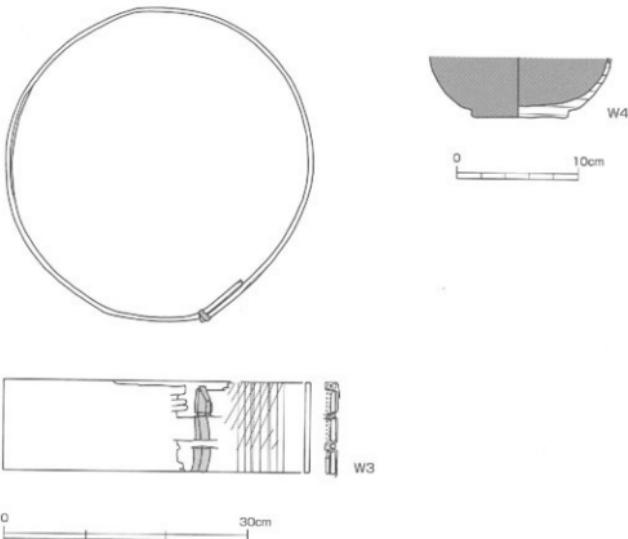
前述したとおり南地区の包含層は上下2層からなり、出土した遺物はすべて土器である。上下いずれの包含層から出土した土器も破片が多く実測に耐えうるものは少なかった。

上層包含層は遺構面を覆うもので、出土土器は中世に属するものが主体をなし出土遺物の大半を占めている。それに次いで古代の土器があり数量的にも目立っている。傾向としては南3区からの出土が多い。

下層包含層は遺構面以下にあり、出土土器は弥生時代後期から古墳時代初頭、弥生時代前期に属するものである。出土箇所は南1区の下層確認トレンドから出土したものであるが、分布状況や土層観察では局部的なもので、包含層が他の地区まで広がる可能性は少ないと思われる。



第35図 SE01出土木器(1)



第36図 S E 0 1 出土木器 (2)

1. 上層包含層出土土器 (第37図71~80)

古代の土器

71は須恵器壺B蓋である。つまみのつく頂部は平坦で、周縁にかけて丸みを持つ。端部は短く屈曲させる。

72は須恵器壺Aである。平らな底部に外傾する口縁部がつく。

73は稜挽である。口縁部中位付近で屈曲し、鈍い稜線がつく。口縁端部は外反する。底部には直立ぎみの高台がつく。

中世の土器

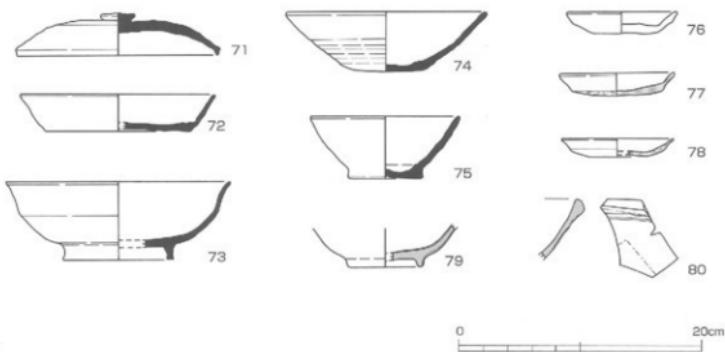
74・75は須恵器壺である。いずれも体部は直線的に開き、短部は丸くおさめる。74は見込み部分がわずかにくぼむ。75の底部は平高台状を呈する。

76はロクロ成形の土師器小皿である。平底の底部から上外方に体部が開く。底部には糸切り痕が残る。

77・78は瓦器小皿である。77は底部が平坦で体部下半にはユビオサエを留めている。口縁部は横方向のナデを施す。78は平坦な底部からやや丸みをもって口縁部に統く。口縁部は横方向のナデを施す。

79は青磁碗底部である。高台内の釉を環状に削り取っている。14世紀後半~15世紀の龍泉窯の製品であろう。

80は玉縁をもつ白磁碗の破片である。体部下半は露胎する。



第37図 南地区上層包含層出土土器

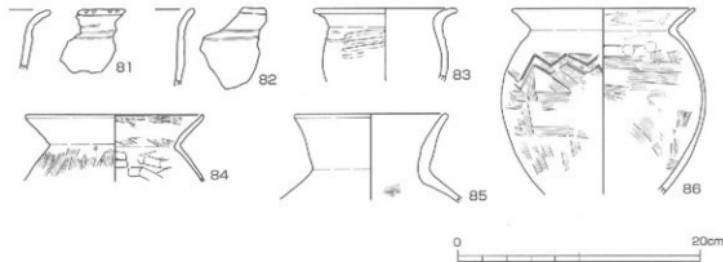
2. 下層包含層出土土器（第37図81～86）

- 81・82は40層出土で、弥生時代前期の壺の口縁部である。ゆるやかに屈曲し如意形を呈す。
 83は弥生時代後期の壺で、緩やかに屈曲し外反しながら口縁端部に小さな面を持つ。
 84は外面刷毛仕上げの庄内式壺で、体部内面はヘラケズリを施し口頸部は横ハケで調整する。内縁味に口縁端部は若干つまみあげ外側に端面をつくる。
 85は直口壺。やや外彎気味に直立する頸部から、口縁付近ではやや外彎気味となり端面を持つ。
 86も頸部上半を横ないしは斜め方向のハケを施した後、下半を中心に縱ハケを施す。頸部上半に2本の棒状工具による平行沈線からなる2条の山形文を施す。

第4節 小 結

1. 遺 構

今回の調査で検出した遺構は12世紀後半から13世紀代を主体としたものである。南地区的近隣地域



第38図 南地区下層包含層出土土器

では神戸市教委第1次調査区、復興住宅建設に伴う調査区など数次にわたる調査が行われており、南地区の成果と同時期の遺構を主体とした集落跡が検出されている。これら周辺の調査では、直線的にのびる溝を境として遺構が密集する範囲と疎らな範囲があり、遺構が密集する部分では掘立柱建物を構成する柱穴を中心に井戸・土坑などが検出されている。これらの調査成果から、水田などの耕作地が広がる中に、溝によって区画された屋敷地が点在する中世集落を想定している。

本調査区でも南3区で掘立柱建物群とそれに隣接する井戸を検出している。これらの遺構の周辺については遺構が疎らな空間が広がっている。過去の調査成果から、溝などの明確な区画こそもたないが、平成11年度調査区と12年度調査区南3区西半部にまたがって検出した掘立柱建物と井戸で1つの屋敷地が構成され、南1区および南3区東半部がその周辺の耕作地になるものと考える。屋敷地は、その北側は主要地方道神戸・明石線に重複する山陽道、西側は後述する南北方向の地割によって2面が区画されていたものと思われる。今回検出した掘立柱建物は、建物の重複や建て替えがほとんどなく、柱穴も建物を構成するもの意外にほとんど検出していないことから、屋敷地の有続期間は長期間ではなかったと思われる。

なお南地区には調査区を東西に分ける南北方向の道路が存在する。この道路は明治時代に作成された地形図にも記載され、長田神社への参道と繋がっている。南1区検出の鈴溝が東西方向にのびているのに対し、この道路をはさんだ南3区のそれは南北方向にのびていることから、この道路は少なくとも13世紀頃までさかのほる地割に基づくものと考える。

2. 出土遺物

出土した遺物は井戸出土の木器を除くと土器ばかりである。土器は遺物包含層出土のものと遺構出土のものに分かれる。出土量は遺物包含層出土のものが大半を占め、遺構出土のものは少ない。

遺構面を覆う上層包含層からは古墳時代以降の土器が出土しているが、主体となる時期は古代および中世である。

古代の土器については、当該時期の遺構は検出されていないものの、破片ながらある程度の量が出土している。中でも徒渕の出土は注目されよう。本調査区の北側を東西にはしる主要地方道神戸・明石線は古代以降の山陽道をほぼ踏襲したもので、付近には須磨駅家に関連する遺跡と考えられている大田町遺跡がある。調査区の東を流れる苅藻川流域には六甲山南麓の西部で唯一古代寺院の可能性がある室内遺跡があり、南地区的対岸には奈良時代の大型建物が検出された御藏遺跡が所在する。本調査区包含層出土の遺物は古代山陽道や苅藻川沿いに展開した官衙・寺院やそれに関連した施設、あるいは有力な集落などの遺跡から流出した遺物であろう。

中世の土器については遺物包含層出土のものと少量ながら遺構出土のものがある。出土した土器には須恵器、土師器、瓦器と若干の磁器がある。須恵器碗はいずれも見込み部の凹部が消滅している。須恵器捏鉢は圓化しえなかつたが口縁端部を上下に拡張したものが出土しており森田編年の第Ⅱ期2段階に相当すると考えられる。12世紀後半から13世紀代の年代が与えられ、その他の土器についてもおおむねその範囲に収まるものであろう。また近畿の調査で出土する土器とも大差ない時期のものである。一部中世後期まで下る土器も見られたが、それに伴う遺構はない。

今回の調査で出土した土器のうち瓦器は10点程度しかなく、実測に耐えない小片が大半であった。調査区の制約があり、必ずしも本来の状況を反映しないと思われるが、少なくとも本調査区では圧倒的

とは言えないまでも量的に須恵器優位の状況にある。これは須恵器の生産地である播磨に近い揖津西端付近の状況を反映しているものと思われる。

下層包含層出土土器は弥生～古墳時代の遺物であるが、弥生時代前期と弥生時代末～古墳時代初頭の2時期に大別できる。比較的ローリングの少ない良好な残存状態で出土しているが、出土が局部的であり、遺構面を構成するような安定した堆積が見られない。古墳時代以前の遺構面が確認されている主要地方道神戸・明石線の北側の神戸市教委第4次調査区と南地区は約1mの比高差をもち、土層観察によても生活域を外れた低湿地の様相を呈するようで、古墳時代以降においても土地利用された形跡はみられない。土地が安定化し、本格的に生活域となるのは古代以降まで待たなければならないようである。これは復興住宅に伴う調査区の下層で確認された状況とも類似している。



写真5 開通した阪神高速神戸山手線長田入口

第6章 結語

御船遺跡は震災後初めて存在が明らかとなった遺跡であり、震災復興関連事業を中心に周辺の再開発が進む中、発掘調査も進められていった。これまでに兵庫県教育委員会と神戸市教育委員会によって10箇所以上の地点で本発掘調査が行われているが、最大でも700 m²あまりで、いずれも小規模な調査である（第1章第1表～第3表参照）。

それぞれの地点で明らかとなった遺跡の内容は同一ではなく、時代によって遺跡の中心は移り変わっている。ここでは、前章までの各小結での記述をとりまとめ、長田神社境内遺跡や長田南遺跡など近接する周辺遺跡の調査成果とも合わせて、時代を追って、御船遺跡の変遷を素描してみたい。

弥生時代

南地区で弥生時代前期の土器が、第8次調査地点で中期の上器がわずかに出土しているが、遺構が伴うのは後期になってからである。苅藻川に近い第2・4次調査地点では弥生時代後期の水田が発見されており、周辺の低湿地が生産領域として開発されている。水田はこれより南側あるいは西側の調査地点では発見されておらず、北側に広がっているものと考えられる。

この時代の集落は、周辺の地形から考えると、北側に展開する水田域のさらに北側、長田神社付近から延びる舌状の扇状地上に立地していると考えられる。第1・8次調査地点などの自然流路から出土した弥生時代後期の土器も、その上流と考えられる北側の居住城から流れ込んだものであろう。そうすると、長田神社境内遺跡や長田南遺跡で発見されている弥生時代後期～庄内期の集落に伴う水田であった可能性も考えられる。

この水田は、比較的短期間に内に洪水砂層によって埋没しており、各調査地点で洪水性の堆積物から出土している土器からも、弥生時代後期後半～古墳時代初期にかけて、周辺が水害によってかなりの被害が生じたことがうかがえる。長田神社境内遺跡や長田南遺跡の後期集落が衰退するのもこうした水害が一因となっているのかもしれない。

古墳時代

古墳時代以降は先述のような大きな洪水性の堆積物は認められず、自然堤防が形成されることによつて、次第に安定した土地になっていったようである。しかし、前期の段階では、北3区で土坑が5基見られるにすぎない。長田神社の西側で行われた長田神社境内遺跡第7次調査では旧苅藻川左側肩部から多量の布留式併行期の土器が出土し、大規模な集落の存在が予想されている。距離は離れるものの、北3区の土坑との関連を考えてもよいかもしれない。

後期になるとようやく御船遺跡で集落の成立を見る。主要地方道神戸・明石線の北側、北1・2区と第4次調査地点で発見された掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土坑、流路などは集落の南端に位置するものである。両調査地点は100 mほど離れ、その間にある北3区や第2次調査地点では後期の遺構は無く、今のところ面的な広がりを認め難い。こうした状況は、長田神社境内遺跡でも同様で、1次調査などで竪穴住居跡や流路などが発見されているものの、松野遺跡のような大規模な集落の展開は認められない。

この時期には背後の丘陵上に池田町古墳群が形成されており、その築造には御船遺跡の集落も関与したことと考えられる。

飛鳥～平安時代

古墳時代後期と同じく、北側にのみ集落が認められ、しかも、遺構の分布は第2次調査地点に限られる。掘立柱建物跡は7世紀後半、8世紀後半、11世紀後半の3時期あり、11世紀後半には御船遺跡で初めて井戸が掘削されている。遺構の分布状況から、小規模な集落が成立しては短期間のうちに廃れていったのであろう。

ところで、8世紀には官道である古代山陽道が整備されており、その沿道には上沢遺跡、御藏遺跡、神楽遺跡、大田町遺跡など官衛色の濃い遺跡が分布する。こうした遺跡の間に点在する一般集落の一つが御船遺跡の8世紀後半の構造であろう。

鎌倉時代

鎌倉時代になると、初めて山陽道の南側に集落が展開し、北側には遺構が認められなくなる。南側の中世集落は、刈藁川に近い本報告の南地区とこれより西に約150m離れた大道通3丁目周辺の調査地点の二つに分かれる。それぞれ数棟の掘立柱建物で構成され、井戸や可耕地を

伴う。後者周辺では小規模な溝で区画され、3つ程の屋敷地に分かれるようである。掘立柱建物や溝の向きは北側を通る山陽道におおむね平行あるいは直交しており、道路にあわせて屋敷地を展開させている。

これらの屋敷地は、上沢遺跡や二葉町遺跡、松野遺跡をはじめ周辺の多くの同時期の遺跡と同じく、ほぼ13世紀代の内に廃絶しており、この時期に、中世前半の村落は大きく解体したようである。

その後、北3区で14世紀代の土坑が1基発見されている以外、御船遺跡から生活の痕跡は消え去る。

震災後10年を経て、阪神高速神戸山手線が部分開通した現在、周辺の再開発は一段落しており、新たな発掘調査も行われていない。今年度は、本報告のみならず兵庫県教育委員会が調査を行ったフレル長田大道建設事業に伴う発掘調査報告書も刊行される。神戸市教育委員会の調査については報告書が未刊行であるが、年報を参考とさせていただいた。

弥生時代～室町時代まで断続的に集落が展開する御船遺跡であるが、各時期の遺跡の広がりや刈藁川や古代山陽道との関係など、まだ十分な情報が得られていない面も多い。大雑把な変遷を述べたに過ぎないが、本報告が御船遺跡の様相を明らかとすることに多少なりとも寄与できれば幸いである。

参考文献

【御船遺跡】

- 東 喜代秀 1999 「御船遺跡 第1次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
池田 繁 2000 「御船遺跡 第2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
富山直人 2000 「御船遺跡 第3次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
西岡誠司ほか 2001 「御船遺跡 第4次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
石島三和 2001 「御船遺跡 第8次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
長瀬誠司ほか 2005 「御船遺跡Ⅱ」 兵庫県教育委員会

【長田南遺跡】

- 池田 繁 2001 「長田南遺跡 第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
谷 正俊 2002 「長田南遺跡 第2次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会

【長田神社境内遺跡】

- 黒田恭正 1990 「長田神社境内遺跡発掘調査概報」 神戸市教育委員会
西岡誠司ほか 1992 「長田神社境内遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
西岡巧次ほか 1994 「長田神社境内遺跡 第5次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
前田佳久ほか 1999 「長田神社境内遺跡 第6次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
岡本敏行ほか 1999 「長田神社境内遺跡 第7次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
藤井太郎ほか 2000 「長田神社境内遺跡 第10次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
山本雅和ほか 2002 「長田神社境内遺跡 第13次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会

報告書抄録

ふりがな	みふねいせき							
書名	御船遺跡							
副書名	神戸市道高速道路2号線(神戸山手線)建設事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第278冊							
編著者名	藤田淳・長瀬誠司・上田健太郎							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日	西暦2005(平成17)年3月18日							
所収 遺跡名	所在地 市町村	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		遺跡調査番号						
御船 遺跡	兵庫県 神戸市 長田区 大道通 1丁目・ 2丁目	28106 970131 980207 2000232 980178 980273 990134 990143 2000273	確認調査① 確認調査② 確認調査③ 本発掘調査① 本発掘調査② 本発掘調査③ 本発掘調査④ 本発掘調査⑤	34度 39分 53秒	135度 8分 50秒	確認調査① 1997年5月6日 確認調査② 1998年12月17日 ・18日 確認調査③ 2000年7月28日 本発掘調査① 1998年11月9日 ～11月16日 本発掘調査② 1999年3月8日 ～3月26日 本発掘調査③ 1999年4月19日 ～4月27日 本発掘調査④ 1999年5月17日 ～5月19日 本発掘調査⑤ 2000年12月27日 ～ 2001年2月23日	確認調査① 16m ² 確認調査② 36m ² 確認調査③ 18m ² 本発掘調査① 150m ² 本発掘調査② 197m ² 本発掘調査③ 135m ² 本発掘調査④ 37m ² 本発掘調査⑤ 656m ²	神戸市道高 速道路2号 線(神戸山 手線)建設 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
御船遺跡	集落跡	古墳時代後期 平安末～鎌倉時代初	堅穴住居跡・水田状 区画・掘立柱建物 跡・溝・波路 掘立柱建物跡・井戸	須恵器・土師器 須恵器・曲物・漆器	包含層 より稜 楓出土			

*緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

図 版



全景（東から）



西端部全景（南から）



西端部全景（西から）



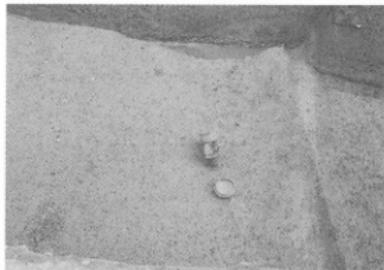
西端部北壁（南から）



中央付近南壁（北東から）



東端部東壁（南西から）



SD03（北から）



SD03（西から）



SD03断面（北から）



SD03土器出土状況（東から）



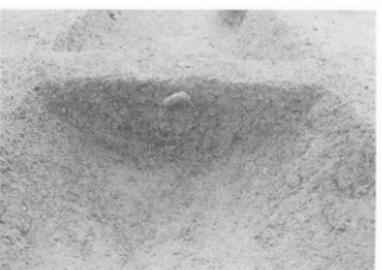
SD03西側の足跡状窪み（南から）



SB01-P7断面（西から）



SB01-P8断面（南から）



SD01断面（東から）

図版4 北2区 水田状区画



全景（東から）



全景（西から）



全景（南西から）



上面検出状況（西から）



断面（南東から）



全景（東から）



溝全景（北から）



全景（北から）



土器出土状況（北西から）



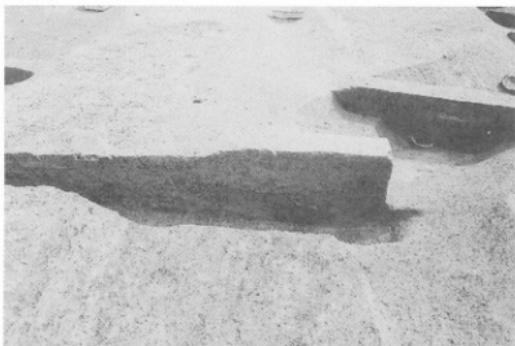
土器出土状況（西から）



断面（南から）



調査区南壁の断面（北から）



S D O 6 断面 (北から)



S D O 7 断面 (南から)



S D O 2 断面 (西から)



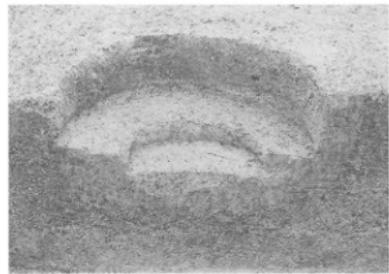
全景（南から）



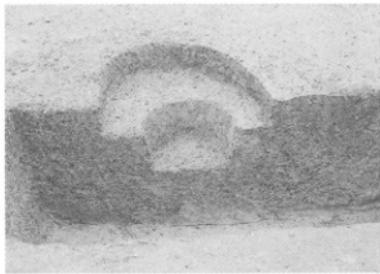
P 1 断面（南から）



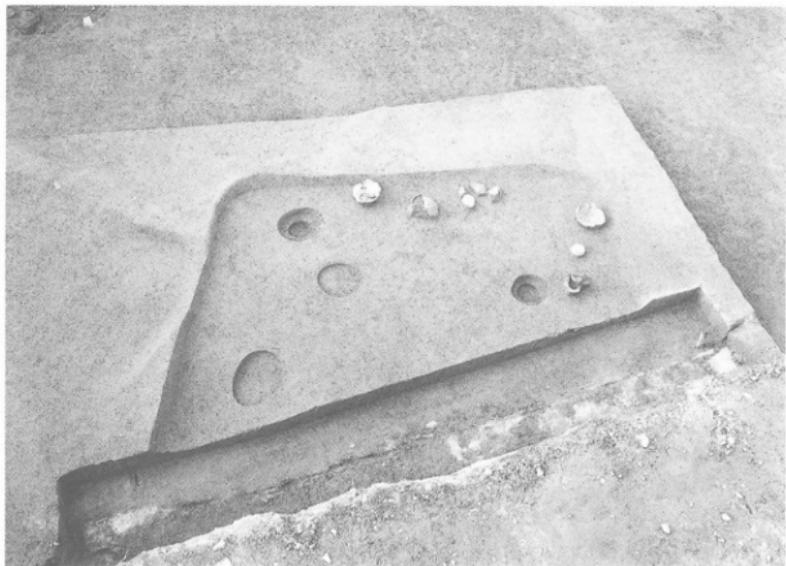
P 2 断面（南から）



P 3 断面（南から）



P 4 断面（南から）



全景（南から）



検出状況（南から）



土器出土状況（南東から）



土器出土状況（西から）



土器出土状況（西から）



全景（西から）



南壁東端部（北西から）



SKO 2 (北から)



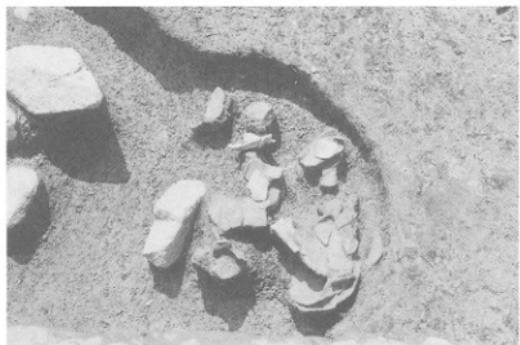
SKO 3 (南東から)



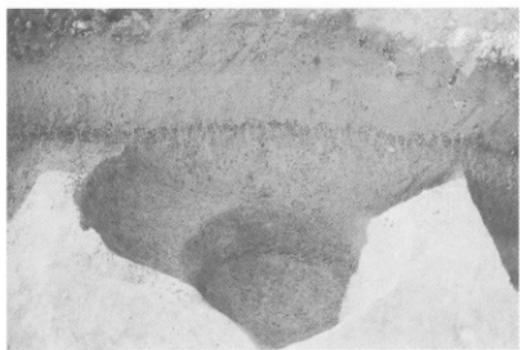
SKO 4 (南西から)



SKO1 土器出土状況（南から）



SKO1 土器出土状況（北から）



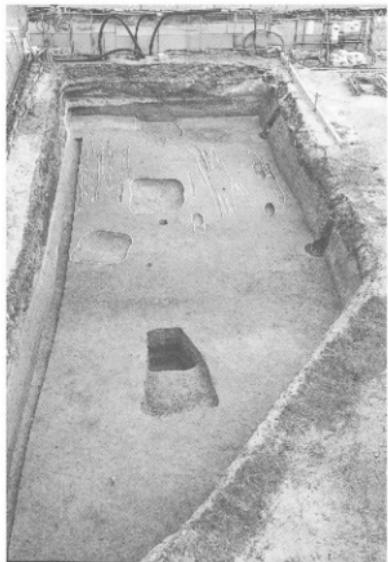
SKO1 完掘状況（南から）



南地区付近空中写真（東から）



南地区遠景（東から）



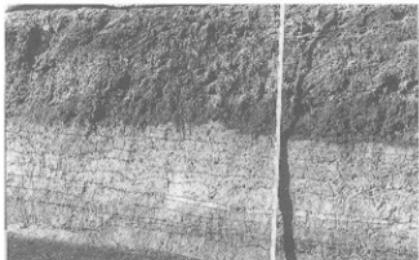
南1区全景（西から）



南2区全景（南から）



南3区全景（西から）



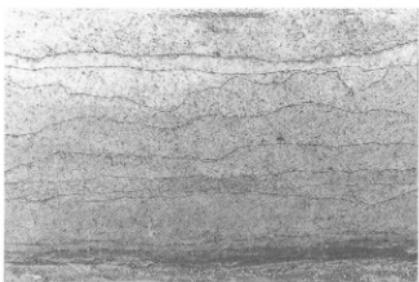
南1区北壁（南から）



南1区下層トレンチ北壁（南から）



南2区北壁（南から）



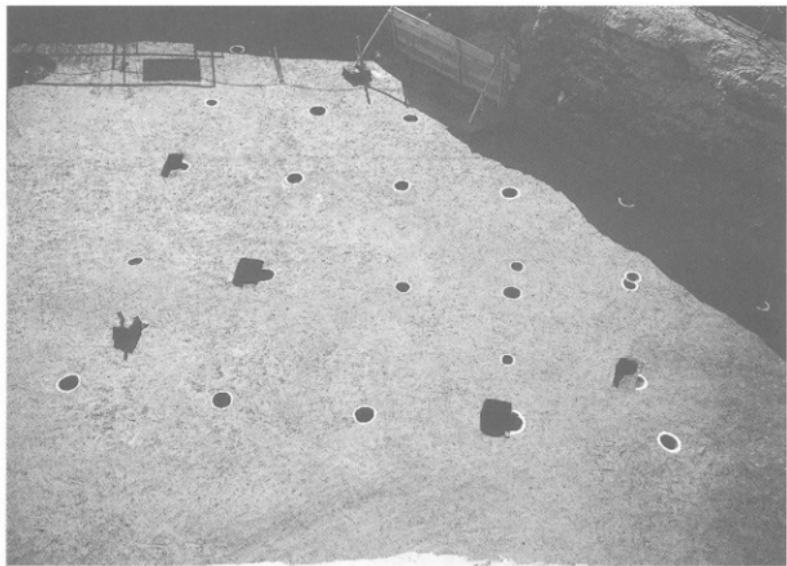
南3区南壁（北から）



南1区作業風景



南2区作業風景



S B 0 1 ~ 0 3 全景 (東から)



S B 0 1 - P 1 断面 (南から)



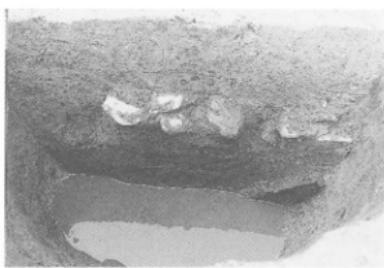
S B 0 1 - P 1 断面 (南から)



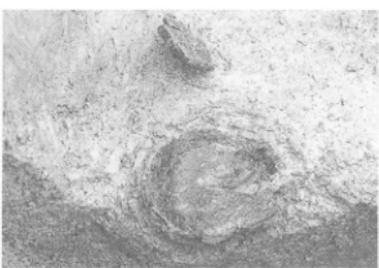
S B 0 1 - P 1 根石検出状況 (南から)



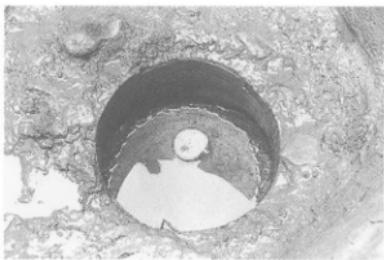
全景（南から）



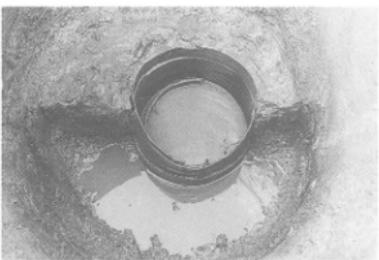
上層断面（南から）



埋土上層木器出土状況（南から）



曲物（南から）



曲物断ち割り断面（南から）



SKO 1 完掘状況（東から）



SKO 2 完掘状況（北から）



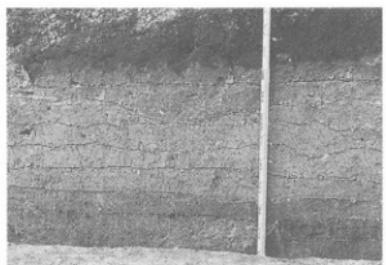
SKO 1 断面（西から）



SKO 2 断面（東から）



SKO 3 完掘状況（北から）



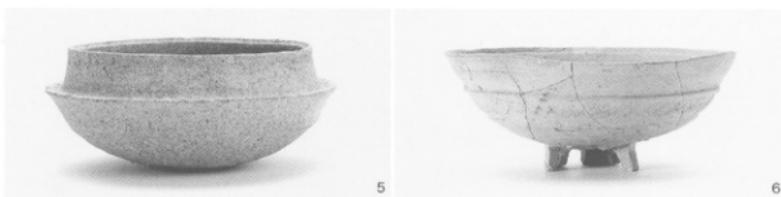
SKO 4 断面（南から）



SKO 3 断面（西から）



SKO 5 断面（東から）





14



15



16



17



18



21



19



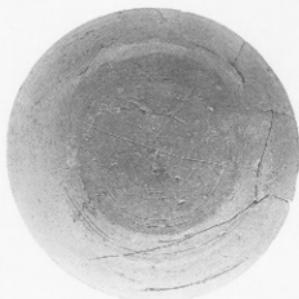
24



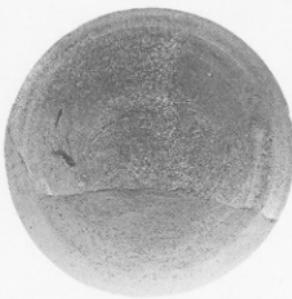
23



25



26



27



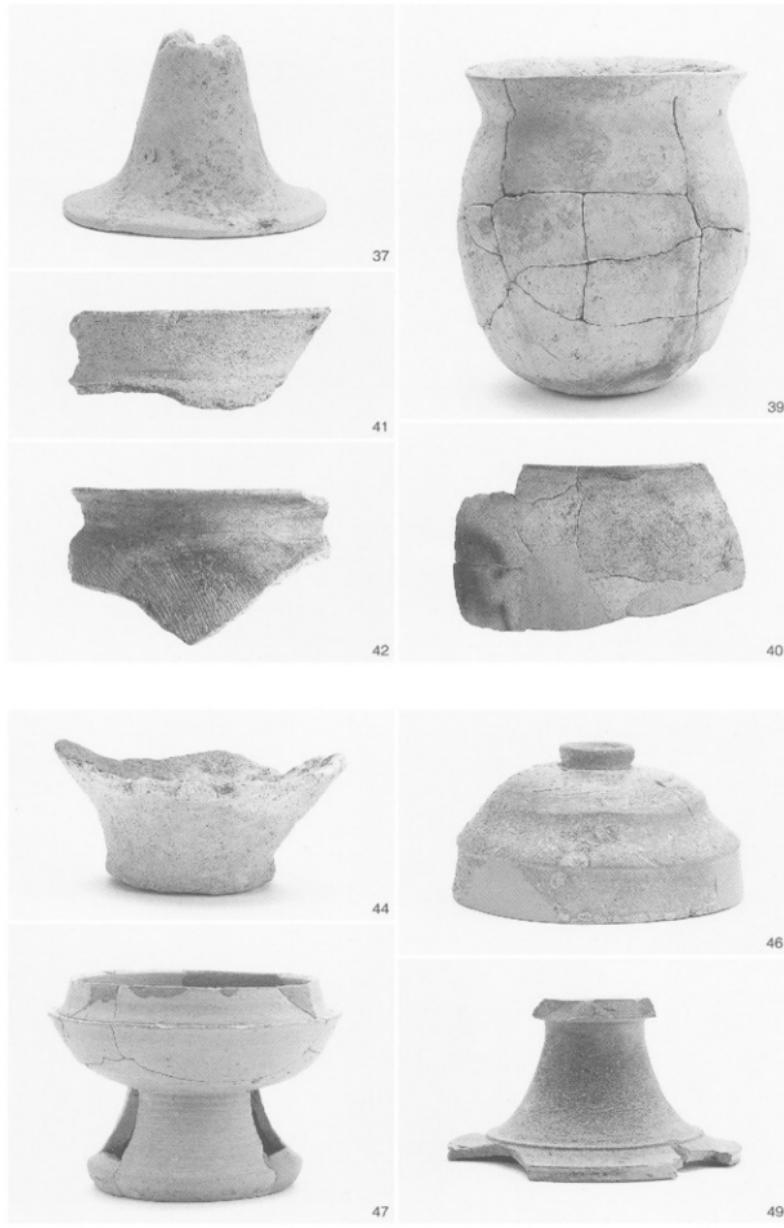
33

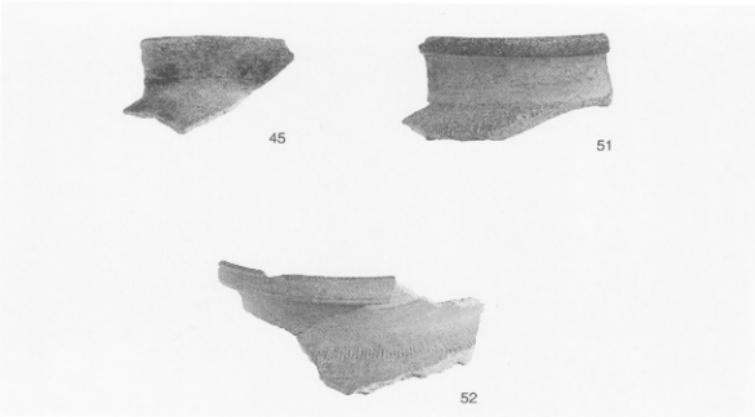
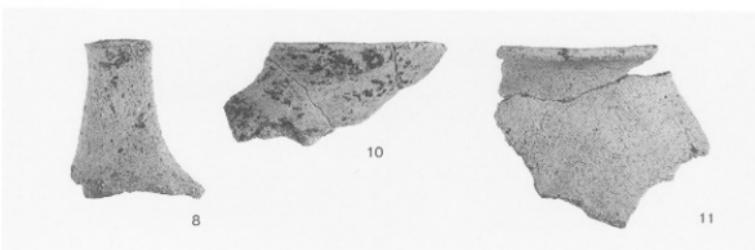
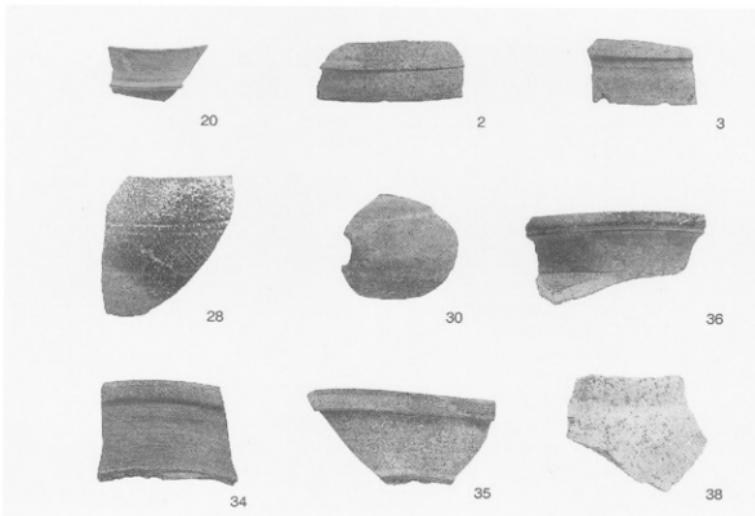


29

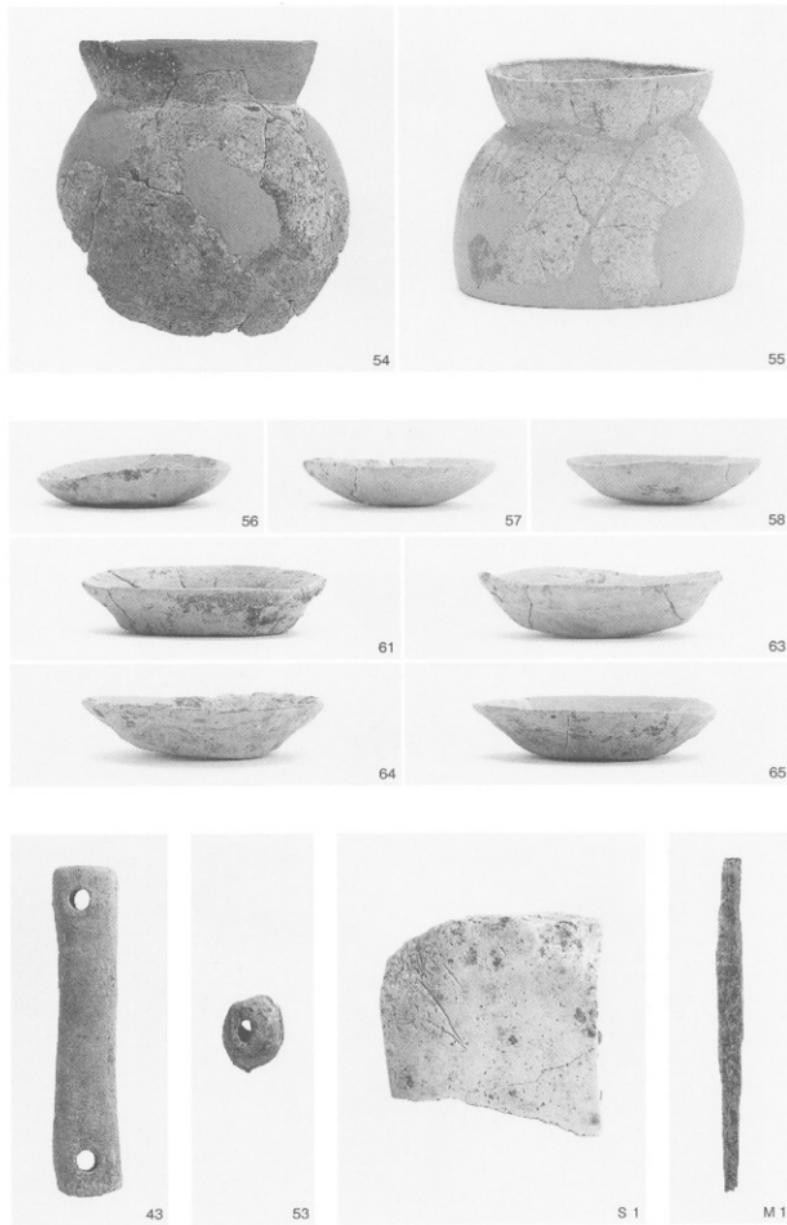


31





図版 24 北地区 出土土器 6・石器・金属





68



69



67



70



71



74



75

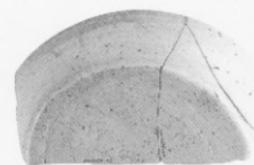


76



77

图版 26 南地区 出土土器 2



72



78



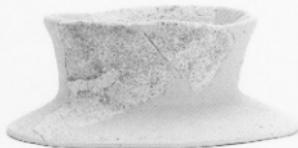
80



79



73



85



81



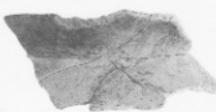
82



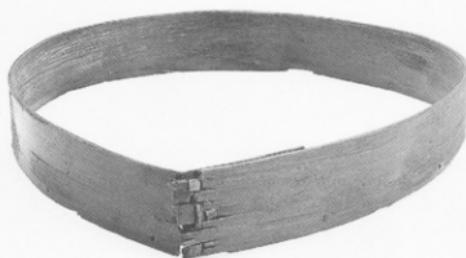
86



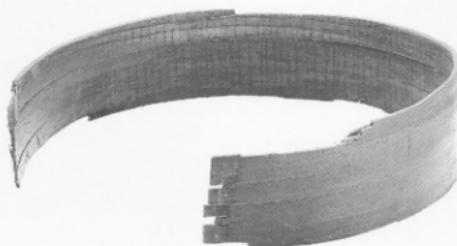
83



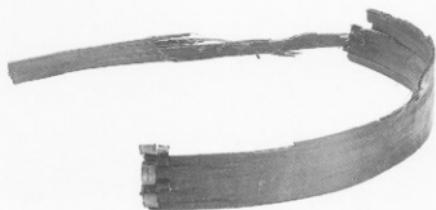
84



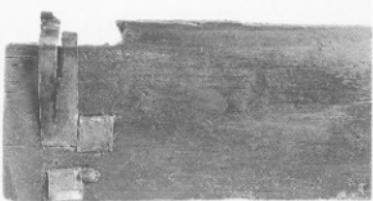
W 1



W 3



W 5



W 2



W 4

兵庫県文化財調査報告 第278冊

御 船 遺 跡

神戸市道高速道路2号線(神戸山手線)建設事業に伴う発掘調査報告書

平成17年3月18日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39
